

首都大学東京法科大学院 年次報告書(自己点検・評価報告書)

2015年度版

首都大学東京大学院社会科学研究科法曹養成専攻

< 目 次 >

第 1 . 法科大学院の現況	1
第 2 . 単年度評価の結果	9
第 3 . 外部評価結果について	1 3
第 4 . 教員の業績及び社会貢献活動	1 5

第 1. 法科大学院の現況

1 設置者

公立大学法人首都大学東京

2 教育上の基本組織

首都大学東京 大学院社会科学部 法曹養成専攻

3 教員組織（2016 年 3 月末日）

2015 年度においては、専任教員 13 名（うち、みなし専任教員 3 名）、兼任教員 14 名、兼任教員 25 名で、法科大学院における教育を実施した。

【2015 年度教員一覧】

教員名	職名	分類	専攻	その他特記事項
饗庭 靖之	教授	みなし専任	民法	実務家教員
石崎 泰雄	教授	専任	民法	
笠井 治	教授	みなし専任	刑事訴訟法・弁護士実務	実務家教員
木村 光江	教授	専任	刑法	
徳本 広孝	教授	専任	行政法	法曹養成専攻長
富井 幸雄	教授	専任	憲法	
野中 伸子	教授	みなし専任	民事訴訟法・裁判実務	実務家教員（裁判官）
深津 健二	教授	専任	経済法・消費者法	
峰 ひろみ	教授	専任	刑事訴訟法	実務家教員
三代川 三千代	教授	専任	民法	実務家教員
矢崎 淳司	教授	専任	商法	
我妻 学	教授	専任	民事訴訟法	
手賀 寛	准教授	専任	民事訴訟法	
大杉 寛	教授	兼担	行政学・都市行政論	
長谷川 貴陽史	教授	兼担	法社会学	
星 周一郎	教授	兼担	刑法・刑事訴訟法	
天野 晋介	准教授	兼担	労働法	
尾崎 悠一	准教授	兼担	商法	
門脇 雄貴	准教授	兼担	行政法	
北村 朋史	准教授	兼担	国際法	
木村 草太	准教授	兼担	憲法	
作内 良平	准教授	兼担	民法	
谷口 功一	准教授	兼担	法哲学	
種村 佑介	准教授	兼担	国際私法	
西貝 小名都	准教授	兼担	憲法	
堀田 周吾	准教授	兼担	刑事訴訟法	
山科 麻衣	准教授	兼担	刑法・刑事訴訟法	

教員名	職名	分類	専攻	その他特記事項
石口 修	講師	兼任	民法	
石田 拓時	講師	兼任	弁護士実務	実務家教員
石野 能之	講師	兼任	弁護士実務	実務家教員
稲田 和也	講師	兼任	民法	
岩出 誠	講師	兼任	労働法	実務家教員
上岡 亮	講師	兼任	弁護士実務	実務家教員
大橋 弘	講師	兼任	民法	実務家教員
小倉 秀夫	講師	兼任	知的財産法	実務家教員
川端 一光	講師	兼任	統計学	
川村 栄一	講師	兼任	租税法	実務家教員
工藤 莞司	講師	兼任	知的財産法	実務家教員
駒田 泰土	講師	兼任	知的財産法	
酒井 享平	講師	兼任	経済法	実務家教員
鈴木 大介	講師	兼任	会計学	
永井 敏雄	講師	兼任	刑法	実務家教員
中島 経太	講師	兼任	刑事訴訟法・裁判実務	実務家教員（裁判官）
夏 莉 一	講師	兼任	弁護士実務	実務家教員
難波 知子	講師	兼任	弁護士実務	実務家教員
橋口 泰典	講師	兼任	企業法務	実務家教員
福田 清明	講師	兼任	民法	
藤田 新一郎	講師	兼任	弁護士実務	実務家教員
本多 貞雅	講師	兼任	弁護士実務	実務家教員
前田 雅英	講師	兼任	刑法・刑事訴訟法	
森田 悦史	講師	兼任	民法	
森山 茂徳	教授	兼任	比較政治	

4 学生の在籍状況

（１）収容定員及び在籍者数

2015 年度収容定員 156 名（入学定員 52 名）

2015 年度在籍者数 115 名（うち 2 名は 9 月に修了、58 名は 3 月に修了）

（２）学年別の在籍状況

学年	区分	年度当初人数	退学・除籍者数	原級留置者数	進級・修了者数
1 年次	未修 1 年	9 名	0 名	1 名	8 名
2 年次	未修 2 年	5 名	0 名	0 名	5 名
	既修 1 年	40 名	1 名	1 名	38 名
3 年次	未修 3 年	7 名	0 名	0 名	7 名
	既修 2 年	54 名	0 名	1 名	53 名

5 入学者選抜

(1) アドミッション・ポリシー

首都大学東京法科大学院の教育理念は、東京をはじめとする大都市の抱える複雑な問題に対して、それを解決する能力を有する法曹を養成することである。この理念に基づき、本法科大学院の入学者選抜では、複雑な社会現象に高い関心を示し、それを的確に把握し、分析・判断するための論理的思考力を有し、それを的確に表現することのできる人材を、幅広く求めるものとしている。

(2) 2016 年度入学者選抜の実施

2015 年度も、引き続き、未修・既修ともに、1 次選抜（書類選考）、2 次選抜（筆記試験）、3 次選抜（口頭試問）を実施し、適切かつ公正な入試を実施した。適性試験の最低基準点も引き続き設定した。

ア 実施方法

2016 年度入学者選抜については、2 年履修課程と、3 年履修課程とを区別して、下表に掲げる方法により、入学者選抜を実施した。なお、2016 年度入学者選抜より、商法及び行政法を試験科目から除き、憲法、民法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法の 5 科目に変更するとともに、民事訴訟法及び刑事訴訟法の出題形式を簡易論述式試験から短答式試験に変更し、競争倍率の向上による入学者の適性・能力の確保に努めることとした。

	2 年履修課程	3 年履修課程
募集定員	42 名	10 名
受験資格	・以下のいずれかの要件を満たす者が受験資格を有する（2 年履修課程、3 年履修課程共通）。 (1) 日本の大学を卒業した者及び平成 28 年 3 月末日までに卒業見込みの者 (2) 学校教育法第 104 条第 4 項の規定により学士の学位を授与された者及び平成 28 年 3 月末日までに授与される見込みの者 (3) 外国において学校教育における 16 年の課程を修了した者及び平成 28 年 3 月末日までに修了見込みの者 (4) 外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における 16 年の課程を修了した者及び平成 28 年 3 月末日までに修了見込みの者 (5) 我が国において、外国の大学の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置づけられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了した者及び平成 28 年 3 月末日までに修了見込みの者 (6) 専修学校の専門課程で文部科学大臣が別に指定するものを文部科学大臣が定める日以後に修了した者及び平成 28 年 3 月末日までに修了見込みの者 (7) 文部科学大臣の指定した者 (8) 大学院において、個別の入学資格審査により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者で、22 歳に達した者	

選抜方法	・一次選抜：書類審査 法科大学院全国統一適性試験及び調査票等による選抜を実施。 ・二次選抜：論文試験 憲法，民法（親族法及び相続法を含む。），刑法について，論述式試験を，民事訴訟法（上訴及び多数当事者訴訟を除く。），刑事訴訟法（上訴を除く。）については短答式試験を，それぞれ実施。 ・三次試験：面接試験 志願者の口頭での意思疎通能力を審査する個別面接試験を実施。	・一次選抜：書類審査 法科大学院全国統一適性試験及び調査票等による選抜を実施。 ・二次試験：論文試験 文章を論理的に理解し，分析・思考した上で文章表現する能力を審査する小論文試験を実施。 ・三次試験：面接試験 志願者の口頭での意思疎通能力を審査する個別面接試験を実施。
------	---	--

イ 実施結果

2016 年度入学者選抜状況は，下表のとおりである。競争倍率は，既修 2.24 倍，未修 2.36 倍，合計 2.26 倍であった。

	3 年履修課程	2 年履修課程
募集定員	10 名	42 名
出願者数	27 名	127 名
第一次選抜合格者数	27 名	126 名
第二次選抜受験者数	26 名	113 名
第二次選抜合格者数	23 名	95 名
第三次選抜受験者数	22 名	92 名
最終合格者数	11 名	51 名
入学者数	5 名	39 名

6 標準修了年限

3 年

※ただし，2 年履修課程の入学者選抜を合格した者については，法学既修者と認定し，修了年限を 1 年短縮している。

7 教育課程及び教育方法

（１）教育課程

2015 年度におけるカリキュラム（2015 年度入学者に対して適用される。）は，以下のとおりである。

			未修1年前期	未修1年後期	未修2年前期	未修2年後期	未修3年前期	未修3年後期	修了要件 単位数	
			既修認定部分(必修のみ)		既修1年前期	既修1年後期	既修2年前期	既修2年後期		
必修科目	法律基本科目	公法系	憲法1	憲法2 行政法	憲法総合1 行政法総合1				必修 10単位	
		民事系	民法1 民法2 民法3 法学入門演習	民法4 民事法入門演習 民事訴訟法1 商法1	民法総合1 民事訴訟法総合1 商法2(未修のみ) 商法総合1	民法総合2 商法総合2	民法総合3 民法総合4	民事訴訟法総合2	必修 34単位	
		刑事系	刑法1 刑法2	刑法3 刑事訴訟法	刑法総合1 刑事訴訟法総合1	刑法総合2			必修 14単位	
	実務基礎				民事訴訟実務の基礎 刑事訴訟実務の基礎 法曹倫理			必修 6単位		
	必修単位数	14単位	16単位	未修16単位 既修14単位	12単位	4単位	2単位	64単位		
	選択科目	法律基本科目	公法系			行政法総合2	憲法総合2	行政法総合3	公法総合演習	
民事系					(民事訴訟法2)	商法総合3	商法総合演習	民法演習 商法総合3 (民事訴訟法総合3)		
刑事系					刑事訴訟法演習	刑法演習 刑事訴訟法総合2	刑事訴訟法演習	刑法演習		
実務基礎				民事裁判と事実認定	租税訴訟実務の基礎 エクスターンシップ	民事裁判と事実認定 刑事裁判と事実認定 エクスターンシップ 模擬裁判 法文書作成 民事裁判演習		選択 4 単位 以上		
隣接基礎科目		法系基礎 科目隣接	法社会学 法哲学 アメリカ法 経済と法						選択 4 単位 以上	
		政治学特殊授業1 政治学特殊授業2 会計学 統計学								
展開・先端科目		公法系				比較憲法 租税法1 独占禁止法1 国際法1	情報法 租税法2 独占禁止法2 国際法2	比較憲法 地方自治法 (租税法演習) (独占禁止法演習)	選択 25 単位 以上	
		民事系			消費者法	倒産法1 知的財産法1 労働法 環境法 国際私法	倒産法2 知的財産法2 社会法総合演習 消費者法 国際取引法	企業法務 知的財産法演習 (現代取引法) 環境法		
		刑事系					医事刑法	経済刑法 刑事政策		
		その他						リサーチ・ペーパー		
年間の履修登録制限単位数		40単位		未修 38単位 既修 36単位		44単位		【修了要件】 97単位以上		
※「未修」は3年履修課程を、「既修」は2年履修課程を、それぞれ指す。 ※()で括られた科目は平成27年度は開講しない。 ※3年履修課程については、2年次以降、一部カリキュラムが変更となる。									(既修は入学時に32単位認定)	

継続的にカリキュラムの改善・改革を実施しており、2015年度より、法学未修者に対する教育を充実させるために法学入門演習、民事法入門演習の2科目の必修科目を新たに開講するとともに、法律基本科目の充実を図るために刑事訴訟法演習を新たに開講した。また、2016年度より、商法及び行政法を入学者選抜の試験科目から除いたことに伴い、2年履修課程1年次向けに、商法及び行政法の2科目を新たに開講することを決定した。

(2) 教育方法

本法科大学院では、各授業における教育方法として、①原則として、質疑応答を含んだ講義とし、出席者の少なくとも1/5以上に指名して発言させること（ただし、3年履修課程1年次の科目及び選択科目の講義については、必ずしも質疑応答を含んだ講義とする必要はなく、科目の特性に応じた講義を行うこととする。）、②3年履修課程1年次の講義については、予習・復習について十分に説明を加えた上で、適切な指導を行うこと、が申し合わされているが、全ての授業において、この申し合わせにしたがった適切な教育方法が実施された。なお、エクスターンシップに関しては、学生に対して予め説明会を行い、守秘義務等について指導を行い、また、終了後に報告書を提出させることで、適切な教育方法が実施された。

さらに、2008年度の認証評価での指摘を受け、2010年度より、法律基本科目（必修科目）の講義の受講者数を適正規模とするよう、講義を2分割して実施しているが、2015年度においても、これを継続した。

また、2015年度においても、専任教員は、毎週1コマのオフィスアワーを設け、学生の質問等に対応した。さらに、年間11回のFD会議を開催し、教育方法の改善に組織的に努めた。具体的には、毎回のFD会議において各授業科目の実施状況に関する議論、意見交換を実施し、さらに教育方法改善のために、教員の相互授業見学を実施し、その報告を行った。

8 成績評価及び課程の修了

(1) 成績評価の方法

本法科大学院においては、各授業科目の成績評価は、一部の可否のみの判定のみを行う科目を除き、5点法をもって行い、2点以上を合格とすることとしている。また、成績の合格・不合格は、絶対評価により決定することとしている。さらに、合格者の成績については、原則として、4段階の相対評価によることとし、相対評価の割合については、おおむね、5を5%、4を35%、3を40%、2を20%としている。

2015年度の授業科目の成績評価は、上記の基準に従い、適正に行われた。なお、2013年度の認証評価を受けて、2015年度においても引き続き、レポートや授業態度・出席点の成績評価の扱いについて厳格に行うことをFD会議において周知徹底した。

さらに2015年度においても、期末試験の実施に当たっては出題の趣旨、採点基準及び成績評価分布の掲示を行い、教員及び学生に周知した。

また、成績評価に対する学生の不服申立制度も整備しており、成績評価の適正を実現する制度的対応を行った。

(2) 課程の修了

ア 修了要件

修了要件は、以下のとおりである（2015年度入学者）。

（ア）修了に必要な単位数

3年履修課程 97 単位

2年履修課程 65 単位

※ なお、2年履修課程については、3年履修課程1年次に配置されている憲法1、憲法2、民法1、民法2、民法3、民法4、法学入門演習、民事法入門演習、行政法、商法1、商法2、民事訴訟法1、刑法1、刑法2、刑法3、刑事訴訟法の計16科目（32単位分）について、修得済みと見なしているため、修了に必要な単位数が少なくなっている。

(イ) 修了に必要な単位の内訳

(a) 必修科目

①法律基本科目：必修58単位

【内訳】

・公法系科目：必修10単位（下記5科目）

（憲法1、憲法2、憲法総合1、行政法、行政法総合1）

・民事系科目：必修34単位（下記17科目）

（民法1、民法2、民法3、民法4、法学入門演習、民事法入門演習、民法総合1、民法総合2、民法総合3、民法総合4、商法1、商法2、商法総合1、商法総合2、民事訴訟法1、民事訴訟法総合1、民事訴訟法総合2）

・刑事系科目：必修14単位（下記7科目）

（刑法1、刑法2、刑法3、刑法総合1、刑法総合2、刑事訴訟法、刑事訴訟法総合1）

②法律実務基礎科目：必修6単位

【内訳】

・民事訴訟実務の基礎、刑事訴訟実務の基礎、法曹倫理の3科目。

(b) 選択必修科目

①法律実務基礎科目：4単位以上（ただし必修科目を除く）の履修が必要

②基礎法学・隣接科目：4単位以上の履修が必要。

③展開・先端科目：12単位以上の履修が必要。

④選択科目として開講される基礎法学・隣接科目、法律実務基礎科目、展開・先端科目から合計で25科目以上の履修が必要。

イ 2015年度修了者

2015年度においては、2011年度入学3年履修課程の学生が1名、2012年度入学3年履修課程の学生が2名、2013年度入学2年履修課程の学生が6名、2013年度入学3年履修課程の学生が4名、2014年度入学2年履修課程の学生が47名、修了した。

9 学費及び奨学金等の学生支援制度

(1) 学費

入学金 282,000円（ただし、東京都在住者は141,000円）

授業料（年額） 663,000円

(2) 授業料減免

本法科大学院においては、経済的理由により授業料の納付が困難な者を対象にした、①授業料減免制度、②授業料分納制度がある。

2015年度における利用状況は、下表のとおりである。

	前期	後期
全額免除	13 名	11 名
半額免除	0 名	2 名
分納	2 名	2 名

(3) 奨学金

本法科大学院においては、学業が優れた者を対象とした、大学院生支援奨学金制度があり、2015 年度の実績では 14 名に対して給付（165,000 円）を行った。

また、日本学生支援機構の奨学金制度を利用することも可能であり、2015 年度の実績では、第一種として 18 名、第二種として 5 名が採用された。

10 修了者の進路及び活動状況

2015 年度修了者数は、3 年履修課程 7 名、2 年課程 53 名、計 60 名である。この修了者全員、60 名が司法試験に出願し、うち 12 名が合格している。

なお、修了生用のメールアドレスの付与、同窓会との連携を深め、修了生の進路把握に努めている。

また、2014 年度以前修了生の進路及び活動状況については、下表のとおり。

修了年度 (平成)	修了者数	司法試験合格者						公務員	企業・団体	その他・受験継続・不明
		合格者数	合格率	内訳						
				裁判官	検察官	弁護士	修習中・その他・不明			
17	41	26	63.4%	6	3	17		2	4	9
18	61	39	63.9%	3	1	35		1	2	19
19	55	32	58.2%	1	1	29	1	3	2	18
20	53	40	75.5%	2		37	1	1	1	11
21	65	37	56.9%	2	2	31	2	2	4	22
22	59	39	66.1%	1	1	33	4	4	3	13
23	59	40	67.8%		2	32	6	2		17
24	50	39	78.0%	1	3	26	9		2	9
25	55	24	43.6%		2	7	15	1		30
26	46	13	28.3%				13			33
合計	544	329	60.5%	16	15	247	51	16	18	181

第2. 単年度評価の結果

1 本法科大学院の理念に適った入学者選抜及び教育が実施されていること

(1) 入学者選抜

まず、アドミッション・ポリシーについて、本法科大学院の教育理念及び目的に照らして適切に設定され、本法科大学院のウェブサイトやパンフレット、入学者選抜説明会等を通じて広く公表された。

また、入試業務を行うための責任ある体制として、入試委員会を設置し、「法科大学院における入学試験実施に関する準則」にしたがい、公平性及び開放性が確保された適正な入学試験が行われた。

なお、入学者選抜における多様性を確保するため、社会的活動や志望理由等を記載した調査票を提出させ、多様な人材を獲得するよう努めているが、法学関係以外の学部出身者又は実務等の経験を有する者の割合は、2016 年入学者では 22.7% (2015 年度入学者では 30.6%) となっている。

(2) 学生の在籍状況

まず、収容人員 156 名に対して、2015 年度の在籍者は、留年者及び休学者を含め 115 名であり、余裕のある適正な水準にあるといえる。また、2016 年度入学者選抜においても、募集定員 52 名に対し、44 名の入学となっており、定員をやや下回るものの適正な水準であるといえる。

(3) 教育内容及び教育方法

まず、教育内容について、具体的には、法律基本科目 40 科目、実務基礎科目 10 科目、基礎法学・隣接科目 8 科目、展開・先端科目 25 科目が開講され、これは、本法科大学院の教育理念を実現するために必要十分な開講科目であると評価できる。

なお、研究者養成をも目的とするリサーチ・ペーパーの授業科目が開設されており、法科大学院教育の任務として、研究者養成も重視している点が評価できる。この点は、2008 年度の認証評価においても特記事項として記載されている。

また、すべての開講科目において、適切な教育方法が実施された。具体的には、原則として、質疑応答を含んだ講義とし、出席者の少なくとも 1/5 以上に指名して発言させるようにするというのが、おおむね、実施された。特に、法律基本科目の授業科目については、教員と学生との双方向型又は多方向型の議論を含んだ授業を、着実に実施した。また、選択科目の講義や 3 年履修課程 1 年次の講義など、必ずしも質疑応答を含む講義が最適な授業方法ということができないものについては、講義方法の授業が実施されたが、各科目で、予習・復習事項を適切に指示することをはじめ、オフィスアワー等を活用し、授業時間外で学生の質問を積極的に受け付けることで双方向となるよう工夫することで、科目の特性に適った授業が実施された。

特に、2015 年度においても、これまでと同様に、すべての専任教員が週 1 コマのオフィスアワーを実施し、一人一人の学生に対する個別的な学習指導が実施されたことからすると、本法科大学院が掲げる実質的な少人数制教育、すなわち学生の一人一人を大切にする教育が

実施されたと評価することができる。

（４）成績評価、進級及び修了判定

成績評価についても、学生の受講者数が極端に少ない等の理由により上記第１の８(１)の基準をそのまま適用することが困難であった授業科目を除き、すべての授業科目について、当該基準に則った成績評価が行われた。なお、受講者数が少なく当該基準を適用することが困難であった科目についても、過度に５が多い等の不適切な成績評価が行われた科目はなかった。

2013年度の認証評価において、成績評価の考慮要素や採点基準の明確性、レポートや授業態度・出席点の成績評価の在り方等について、少数ながら改善を求められた科目があったことから、2015年度においても引き続き、FD会議において、成績評価の考慮要素や採点基準を明確にすることを再確認し、レポートや授業態度・出席点の成績評価の扱いについても厳格に行うよう教員間で周知徹底を図った。

また、再試験、追試験の在り方については、FD会議において厳格な取扱いとすることを再確認し、平常点の扱いについても厳格、公平な扱いとなるよう常に確認している。

さらに、進級制度については、2009年度より導入し、１年次から２年次に進級するためには必修科目30単位のうち26単位以上、２年次から３年次に進級するためには、必修科目28単位のうち24単位以上を履修しなければならないとするなど、厳格な進級要件を課している。また、新たに2014年度より、３年履修課程において２年次から３年次に進級するためには、１年次の必修科目をすべて修得していなければならないとする、より厳格な進級要件を課している。

以上の適切な成績評価並びに進級制度を前提とするため、修了認定に当たっても、適切な認定が行われたものと評価することができる。

（５）修了者の進路及び活動状況

2015年度に修了した60名を含めた128名のうち、25名（19.5%）が2016年司法試験に合格しており、本法科大学院の教育が成果をあげているということが出来る。引き続きさらに教育内容の充実を図っていく必要がある。

また、修了生の進路状況をより詳細に把握していくため、2014年度には全修了生（2013年度以前）を対象にした個別郵送調査を実施し、法曹以外の分野も含めた幅広い進路状況の把握に努めたところであるが、2015年度においても、個別郵送調査は実施しなかったものの、以前より、修了時に修了後の進路に関する調査票を配布するなど、修了生からの連絡を受け付ける体制を整えており、引き続き修了生の進路状況の把握に務めた。

２ 教育内容及び教育方法の改善に努めていること

2015年度カリキュラムにおいては、「法学入門演習」、「民事法入門演習」及び「刑事訴訟法演習」を新設し、３年履修課程の教育を充実させるとともに、演習科目の充実を図った。

教育方法の点については、2010年度より、法律基本科目（必修科目）の講義の受講者数を適正規模とするよう、講義を２分割していることが重要であり、より充実した双方向・多方向授業が可能となっている。

また、従前と同様、合計 11 回の FD 会議を開催し、各回において授業方法の検討がされており、改善に努めたと評価することができる。特に、教員が相互に授業見学を行うことによって、授業方法の改善を実現する制度を実施し、FD 会議で報告するとした点は、特記すべきである。

さらに、これらの会議の中で、公法系科目、民事系科目、刑事系科目の分類にしたがい、授業担当者間で授業内容に関する相互の情報交換・議論を密に行う必要がある旨の意見が出されていたところであるが、2015 年度においても、授業内容に関する精査など、具体的な検討を行った。

3 教員組織の充実及び教育研究環境の充実に努めていること

2015 年度においては、実質的な専任教員が 13 名、学位授与機構の法科大学院評価要綱上の基準に従うと 12 名（みなし専任教員等を含む）という教員組織となったところであるが、この数は、本学の学生数（収容定員 156 名）に鑑みると、最小限の教員組織である。現在も、個々の教員の努力により法科大学院の適切な運営がされていると評価できるが、専任教員又は兼任教員の充実等を継続的に行っていくことが、望まれるところである。

また、2015 年度における各教員の授業負担は、基本的に適切であると評価することができ、教育と研究をバランス良く実施することができる環境が、一定程度、確保されていると考えられる。ただし、今後、実務系科目の一層の拡充や、3 年履修課程の教育の充実など、さらなるカリキュラムの改善を図っていくためには、現在の教員体制でこれらの整備を行うことは困難である。この点に鑑みると、やはり教員組織の充実（専任教員、兼任教員の充実。場合によっては、兼任教員の依頼により、対応することも考えられる。）等を、さらに検討していくべきである。

その他の教員の教育研究環境の充実については、現在、「TKC ローライブラリー」、「D1-Law.Com（第一法規法情報総合データベース）」、「ジュリスト DVD 版」、「最高裁判所判例解説 DVD 版」、「LLI 統合型法律情報システム」などのデータベースが利用可能であり、かなりの法律情報に対して電子的にアクセス可能な設備が整っていると評価することができる。

また、本学では、専門分野に関する教育研究能力の更なる向上を目的とする特別研究期間制度が導入され、専任教員に相当の研究期間が与えられており、2013 年度の認証評価において、優れた点として評価された。なお、2015 年度においては、この制度を活用し、専任教員 1 名が 1 年間の研究期間を取得した。

4 施設、設備等の充実に努めていること

（１）施設・設備の充実

施設・設備の充実として、2008 年度より、学生の学習環境の充実を図るため、図書室の日曜開室・空調の整備、自習室の拡充等を行ってきたが、2015 年度においてもこれを維持するとともに、教室の什器・器機等の充実などを行った。

また、法科大学院図書館の蔵書の拡充も行い、学生からの希望図書の受入れにも努めた。ただし、法科大学院図書室の蔵書は、法科大学院教育という観点からは十分なものであるが、法科大学院の教員の研究環境という観点からはまだ不十分であり、この点、今後も、蔵書の拡充が必要であると考えられる。

以上の点に鑑みると、2015 年度においても、着実に、施設、設備等の充実に努めたと評価

することができる。

(2) 学生支援の充実

まず、学生の経済的支援として、学内の授業料減免・分納制度、日本学生支援機構による奨学金制度があるが、これらは2015年度においても維持され、多くの学生に利用されている。

また、学内の奨学金制度として、大学院生支援奨学金があり、本法科大学院においては、2015年度の実績では14名に対して給付(165,000円)を行った。

さらに、学生支援の観点から、臨床心理士の資格を持ったカウンセラーが配置されており、2013年度の認証評価においても優れた点として評価された。

5 2015年度の法科大学院の総括

以上の点より、自己点検・評価委員会は、2015年度の法科大学院の教育その他の活動は、法科大学院の理念に適った適切なものであったと評価する。2016年度においても、継続して、法科大学院の活動が適切に行われることが望まれる。

なお、改善すべき点として特に検討すべきは、教員組織の充実等を含めた体制の整備を挙げることができる。

また、授業内容の更なる改善については、継続して検討することが望まれる。相互授業見学、学生アンケートをはじめとしたFD活動を、教育改善にさらに活用されることが望まれる。

第3. 外部評価結果について

1 外部評価の概要

2015年度首都大学東京法科大学院の自己点検・評価の結果について、法科大学院自己点検・評価委員会は、今井和男弁護士を外部評価委員として選出し、2015年度の本法科大学院の活動に対する自己点検・評価の結果について、検証を依頼した。

具体的には、法科大学院自己点検・評価委員会 2015年度自己点検・評価結果を今井和男委員に報告し、当該報告に基づき、今井和男委員が、その他の必要な資料等を参照しつつ本法科大学院を視察の上検証を行い、外部評価委員意見を作成した。

2 外部評価委員意見

- (1) 首都大学東京法科大学院の2015年度における活動は、おおむね、首都大学東京自己点検・評価委員会の評価結果どおり、その理念・目的に沿った妥当なものであったと評価します。
- (2) 首都大学東京法科大学院における2015年度の活動の中で、特に優れていると指摘できる点としましては、従来に引き続き、「適切な少人数教育」が実施できたと評価することができる点です。原則として質疑応答を有効に取り入れた講義とし、出席者の一定割合以上を指名して発言させるようにするなど、少人数による双方向又は多方向型の講義が徹底して行われ、オフィスアワーの実施とあわせて、いわばマンツーマンともいえるような学生一人ひとりを大切にする教育が実施されていることは高く評価できます。加えて、毎月行われるFD会議においては個々の学生の履修状況が活発に議論され、さらに、成績不振者には個別に呼出しを行い指導するなど、「コミュニケーションと信頼関係」を重視した、心の通った真の少人数教育が実践されていると思料します。こうした一人ひとりを見つめた教育が行われていることは、司法を担う法曹に必要な資質として、コミュニケーション能力に富んだ豊かな人間性や感受性、幅広い教養と専門的な法律知識などを有する人材の養成を図るという、法科大学院教育の本来のあり方を実践しているものとして、高く評価します。まさに、法科大学院での教育は本来どうあるべきかという原点を忘れないスタンスを守っていると実感します。
- (3) 2016年度の入学選抜においても、3年履修課程、2年履修課程ともに面接試験を実施し、法曹人材としての適格性等をも審査している点は、優秀な法曹人材の確保への情熱が感じられ、高く評価できます。
- (4) 教育カリキュラムについては、2015年度より、3年履修課程教育の充実を図るために「法学入門演習」及び「民事法入門演習」を開講するとともに、法律基本科目の充実を図るために「刑事訴訟法演習」を開設するなど、継続的にカリキュラムの改善・改革に努めていることは評価できます。
- (5) また、学生支援面については、従来に引き続き、修了生用の自習室が整備されていることが特筆に値します。修了後も引き続き学内で学習できる環境が整備されていることで、教員と学生との信頼関係がより強く醸成され、法曹人材養成ファミリーとしての一体感が育まれている印象を強く受けます。そして、法曹資格を有するOB組織に

よる学習相談会や講演会が定期的開催され、学習方法等について有意義な助言を与えるなど、修了生と在校生との連携も有効かつ円滑に行われていることは、学生支援体制の充実として高く評価できます。現役法曹である OB の声を直接聞けることは、法曹の将来像を描く上で有意義であり、高いモチベーションを維持するうえで大きな効果があると評価します。さらに、臨床心理士の資格を有したカウンセラーを配置した相談室が整備され、学生の様々な相談に対応する体制が整っていることは、学生の心身の健康をサポートする点で非常に有意義であり、高く評価します。

- (6) 修了者の進路及び活動状況を把握することは困難な面も多いと思料しますが、引き続き、修了生の進路状況の把握に努めたことは評価できます。今後はさらに、輩出した修了生の活動状況を分析し、本法科大学院の教育理念が実現されているか、社会貢献に寄与しているか等、詳しく検証されることを期待します。
- (7) 教員組織面では、従来に引き続き、経験豊富で優秀な実務家教員を確保しており、研究者教員ともに、質の高い充実した講師陣を確保していることは、理論と実務の架橋を目指すという法科大学院本来の教育にかなうものであり、評価できます。しかしながら、今後、さらなるカリキュラムの改善を図っていくためには、教員組織の充実についても検討していくことが望まれます。
- (8) 訪問調査の結果、特筆すべき特色として、首都大学東京法科大学院の「教育現場の環境としての雰囲気の良いさと暖かさ」が挙げられます。図書館のキャレルの充実、各フロアに設置された談話スペースに代表される学習環境の素晴らしさは、学生の勉学意欲を最大限引き出すのに大きな効果を上げていると考えられます。また、多数のゼミ室や広々とした図書室等、これらの首都大学東京法科大学院の空間全体が、学生にとって何より重要な自由闊達な相互研鑽の勉学環境を確保し、本法科大学院の基本理念である学生一人ひとりの個性を尊重する教育の実践につながっているとともに、現在の学生に欠けていると指摘されるコミュニケーション能力の涵養にも大きく資するものであると評価できます。学生の勉学意欲を引き出すこのようなアットホームな環境づくりは、学生、教員、事務局が三位一体となった風土、一体感によって支えられているとの印象を強く受け、高く評価します。
- (9) 以上のとおり、当職の 2015 年度の本法科大学院の活動に対する自己点検・評価の外部評価は、その理念・目的に沿った優良な活動ができたものと総合評価します。そして、本法科大学院について改善すべき点は、法科大学院自己点検・評価委員会が改善すべき点として挙げた点を含め、なおいくつか残されていますが、本法科大学院では、カリキュラム改編、学習環境の改善など不断の改善努力が続けられていることは明らかで、このような着実な改善と教育クオリティーの向上を、2016 年度以降も期待するところであります。

第4. 教員の業績及び社会貢献活動

《専任教員》教授 饗庭 靖之（民法・実務家教員）

1 略歴

昭和54年 東京大学法学部卒業
昭和54年 農林水産省勤務（～平成8年）
平成10年 弁護士登録（光和総合法律事務所。平成26年から首都東京法律事務所）
平成16年 東京都立大学法科大学院講師
平成17年 首都大学東京法科大学院教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去5年間の担当授業科目）

平成23年度 「民法総合3」「倒産法1, 2」「環境法」「エクスターンシップ」
平成24年度 「民法総合3」「倒産法1, 2」「環境法」「エクスターンシップ」
平成25年度 「民法総合3」「倒産法1, 2」「環境法」「エクスターンシップ」
平成26年度 「民法総合3」「倒産法1, 2」「環境法」「エクスターンシップ」
平成27年度 「民法総合3」「倒産法1, 2」「環境法」「エクスターンシップ」

3 研究活動（過去5年間について）

（1）著書

「デリオバン問題と保険財政への影響」
（共著，平成27年，「社会保険旬報」2600号22頁，社会保険研究所）

4 学外での公的活動，社会貢献活動等

平成10年4月から弁護士として活動し，全国中小企業団体中央会中小企業組合検定試験委員，原子力損害賠償紛争審査会専門委員等の経歴も有する。

《専任教員》教授 石崎 泰雄（民法）

1 略歴

昭和63年 早稲田大学法学研究科博士前期課程修了・法学修士
昭和63年 同博士後期課程入学
平成4年 同単位取得
平成4年 山梨医科大学医学部助教授
平成14年 山梨大学教育人間科学部助教授
平成15年 駿河台大学法学部助教授
平成16年 同教授
平成17年 首都大学東京法科大学院教授（都市教養学部法学系教授）

2 本法科大学院における教育活動（過去5年間の担当授業科目）

平成23年度 「民法1, 3」「民法演習」「現代取引法」

平成24年度 「民法1, 3」「民法演習」「現代取引法」

平成25年度 「民法1, 3」「民法演習」「現代取引法」

平成26年度 「民法1, 2, 3」「民法演習」「現代取引法」

平成27年度 （特別研究期間）

3 研究活動（過去5年間について）

（1）著書

「新民法典講義5 事務管理・不当利得・不法行為」（共著，平成23年，成文堂）

「新民法典成立への道－法制審議会の議論から中間試案へ－」

（編著，平成25年，信山社）

「新民法典成立への扉－法制審議会の議論から改正法案へ－」

（編著，平成28年1月，信山社）

（2）論文

「瑕疵担保責任の『不履行』への統合一法制審議会の議論をめぐって－」

（単著，平成23年，『法学会雑誌』52巻1号）

「不履行における『帰責事由』の機能－法制審議会の議論をめぐって－」

（単著，平成24年，『法学会雑誌』52巻2号）

「意思表示（意思能力・心裡留保・虚偽表示・錯誤・詐欺・強迫・不実表示・意思表示の到達及び受領能力）－法制審議会の議論をめぐって－」

（単著，平成24年，『法学会雑誌』53巻1号）

「債務不履行による損害賠償の範囲－法制審議会の議論をめぐって－」

（単著，平成25年，『法学会雑誌』53巻2号）

「契約の解除・危険負担・弁済の提供・受領遅滞－法制審議会の議論および中間試案の検討－」

（単著，平成25年，『法学会雑誌』54巻1号）

「担保責任の契約不履行への統合一法制審議会の議論および中間試案の検討－」

（単著，平成26年，『法学会雑誌』54巻2号）

「錯誤・詐欺・契約の成立・損害賠償・契約の解除・債権者の帰責事由と解除・危険負担－最終要綱案に向けての法制審議会の議論から－」

（単著，平成26年，『法学会雑誌』55巻1号）

「望まない出産における損害賠償」

（単著，平成27年，新・判例解説 Watch 民法（財産法）No.3）

「法律行為・意思能力・錯誤・契約に関する基本原則・売買－法制審議会の議論から要綱仮案へ－」

（単著，平成27年，『法学会雑誌』55巻2号）

「錯誤・原始的不能・損害賠償・代償請求権・契約の解除・危険負担－法制審議会の議論から要綱仮案・要綱へ－」

（単著，平成27年，『法学会雑誌』56巻1号）

「民法改正法案の構成とその問題点」（単著，平成28年，『法学会雑誌』56巻2号）

4 学外での公的活動，社会貢献活動等

日本私法学会会員，日本比較法学会会員，日本医事法学会会員

《専任教員》教授 笠井 治（刑事系実務科目・実務家教員）

1 略歴

昭和 46 年 東京大学法学部卒業

昭和 48 年 東京大学法学政治学系大学院民刑事法課程修了・法学修士

昭和 50 年 弁護士登録（三原橋法律事務所）

昭和 55 年 神谷町総合法律事務所

平成 13 年 東京リベルテ法律事務所

平成 16 年 東京都立大学法科大学院教授，専修大学法科大学院客員教授

平成 17 年 首都大学東京法科大学院教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 23 年度 「法曹倫理」「刑事訴訟実務の基礎」「模擬裁判」「エクスターンシップ」

平成 24 年度 「法曹倫理」「刑事訴訟実務の基礎」「模擬裁判」「エクスターンシップ」

平成 25 年度 「法曹倫理」「刑事訴訟実務の基礎」「模擬裁判」「エクスターンシップ」

平成 26 年度 「法曹倫理」「刑事訴訟実務の基礎」「模擬裁判」「エクスターンシップ」

平成 27 年度 「法曹倫理」「刑事訴訟実務の基礎」「模擬裁判」「エクスターンシップ」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「法曹の倫理 第 2 版」（共著，平成 23 年，名古屋大学出版会）

「ケースブック刑事訴訟法 第 3 版」（共著，平成 24 年，弘文堂）

「依頼者の意思と専門家裁量」（共著，平成 25 年，第一法規）

「ケースブック刑法 第 5 版」（共著，平成 27 年，弘文堂）

（2）論文

「小特集・裁判員裁判と未必の故意 『問題点の抽出と解決の方向性について』」
（単著，平成 23 年 1 月，『法律時報』1030 号）

「特集＝法曹養成制度改革の方向性『新司法試験の問題点と改善策』」
（単著，平成 23 年 4 月，『法律時報』1033 号）

（3）学会・研究会報告

刑法学会第 89 回大会ワークショップ（平成 23 年 5 月 29 日，法政大学）「法科大学院における刑事法教育」のオーガナイザー

法曹倫理国際コロキウム 2012（平成 24 年 3 月 10 日，東京大学）「検察官及び刑事弁護人の役割と規律」の司会者

法曹倫理国際シンポジウム 2013(平成 24 年 2 月 24 日, 東京大学)「検察官の使命とその職業倫理の課題」の司会者

臨床法学教育学会第 7 回年次大会(平成 26 年 4 月 20 日, 中央大学)法曹倫理部会「刑事手続における証人尋問準備の技術と法曹倫理」報告(臨床法学教育学会機関誌「法曹養成と臨床教育 2014No. 7」105 頁所収)

4 学外での公的活動、社会貢献活動等

昭和 50 年 4 月から弁護士として活動し, 第二東京弁護士会副会長, 日本弁護士連合会常務理事, 司法試験第二次試験考査委員, 法制審議会刑事法部会委員, 国立大学法人評価委員会委員等の経歴も有する。現在, 中央教育審議会法科大学院特別委員会専門委員, 法科大学院協会司法試験等検討委員会主任。日本刑法学会, 東京大学刑事判例研究会, 日本マンション学会に所属。

《専任教員》教授 木村 光江(刑法)

1 略歴

昭和 54 年 東京都立大学法学部卒業
昭和 58 年 東京都立大学社会科学研究科修士課程修了
昭和 59 年 東京都立大学法学部助手
昭和 62 年 東京都立大学法学部助教授
平成 3 年 東京都立大学法学部教授
平成 13 年 博士(法学)(東京都立大学)
平成 16 年 東京都立大学法科大学院教授
平成 17 年 首都大学東京法科大学院教授

2 本学法科大学院における教育活動(過去 5 年間の担当授業科目)

平成 23 年度 「刑法 2」「刑法総合」「経済刑法」
平成 24 年度 「刑法 2」「刑法総合」「経済刑法」
平成 25 年度 「刑法 2」「刑法総合」「経済刑法」
平成 26 年度 「刑法 2」「刑法総合 1」「刑法総合 2」
平成 27 年度 「刑法 2」「刑法 3」「刑法総合 1」「刑法総合 2」

3 研究活動(過去 5 年間について)

(1) 著書

「新・コンメンタール刑法」	(共著, 平成 24 年, 日本評論社)
「条解刑法(第 3 版)」	(共著, 平成 25 年, 弘文堂)
「ケースブック刑法(第 5 版)」	(共著, 平成 27 年, 弘文堂)
「演習刑法(第 2 版)」	(単著, 平成 28 年 2 月, 東京大学出版会)

(2) 論文

- 「2 項犯罪」 (単著, 平成 23 年, 『法学教室』 371 号)
- 「イギリス 2006 年詐欺罪法と詐欺罪処罰の変化」
(単著, 平成 24 年, 『研修』 769 号)
- 「利殖詐欺と金融商品取引法」 (単著, 平成 25 年, 『法学会雑誌』 54 巻 1 号)
- 「性犯罪の法的規制と性的自由に対する罪」
(単著, 平成 26 年, 『町野朔先生古稀記念論文集(上)』 所収)
- 「中国式治療と無資格診療」 (単著, 平成 26 年, 『医事判例百選』)
- 「第三者の行為の介在と因果関係 (3)」
(単著, 平成 26 年, 『刑法判例百選 I』 (第 7 版))
- 「集合住宅の共用部分への立入り」
(単著, 平成 26 年, 『刑法判例百選 II』 (第 7 版))
- 「イギリスにおける 2006 年詐欺罪法と詐欺処罰の限界」
(単著, 平成 26 年, 『川端博先生古稀記念論文集 (下巻)』)
- 「『財産上の利益』の意義について」 (単著, 平成 27 年, 『法曹時報』 67 巻 2 号)
- 「イギリスにおける共犯処罰と 2007 年重大犯罪法」
(単著, 平成 27 年, 『法学新法』 121 巻 11・12 号)
- 「現代社会と財産犯の保護法益」 (単著, 平成 28 年 1 月, 『法学会雑誌』 56 巻 1 号)

4 学外での公的活動、社会貢献活動等

日本刑法学会会員。

最高裁判所簡易裁判所判事選考委員会委員、最高裁判所司法修習委員会幹事・同委員、防衛省防衛人事審議会委員、文部科学省中央教育審議会大学分科会法科大学院特別委員会委員、財務省関税等不服審査会委員、大学評価・学位授与機構法科大学院認証評価委員会委員、内閣府・男女共同参画会議専門調査会委員、厚生労働省医療関係職種行政処分審査会委員、警察庁交通局・一定の病気等に係る運転免許制度の在り方に関する有識者検討会委員、法務省・法制審議会刑事法部会委員、法務省・性犯罪の罰則に関する検討委員会委員等を歴任。

《専任教員》教授 徳本 広孝 (行政法)

1 略歴

- 平成 4 年 金沢大学法学部法学科卒業
- 平成 6 年 東京大学大学院法学政治学研究科修士課程修了・法学修士
- 平成 10 年 東京大学大学院法学政治学研究科博士後期課程単位修得退学
明治学院大学法学部専任講師、同助(准)教授を経て
- 平成 19 年 首都大学東京法科大学院准教授
- 平成 23 年 首都大学東京法科大学院教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去5年間の担当授業科目）

平成23年度 「行政法総合1, 3」「公法総合演習」「地方自治法」「情報法」
平成24年度 「行政法総合1, 3」「公法総合演習」「地方自治法」「情報法」
平成25年度 「行政法総合1, 3」「公法総合演習」「地方自治法」「情報法」
平成26年度 「行政法総合1, 3」「公法総合演習」「地方自治法」「情報法」
平成27年度 「行政法総合1, 3」「公法総合演習」「地方自治法」「情報法」

3 研究活動（過去5年間について）

（1）著書

「学問・試験と行政法学」（単著，平成23年，弘文堂）
「条解 行政情報関連三法」（共著，平成23年，弘文堂）
「行政法判例集Ⅱ 行政救済法」（共著，平成24年，有斐閣）
「行政法判例集Ⅰ 行政法総論・組織法」（共著，平成25年，有斐閣）
「現代行政訴訟の到達点と展望」（共編著，平成26年，日本評論社）
「事例別 実務行政事件訴訟法」（共著，平成26年，弘文堂）
「行政不服審査の実務〔裁決（44条～50条）〕」（共著，平成27年，第一法規）

（2）論文

「研究の自由と個人情報保護-ドイツのデータ保護法における研究条項の意義-」
（単著，平成23年，日本音楽教育学会『音楽教育学』41巻2号）
「海難原因解明裁決」（単著，平成24年，『行政判例百選Ⅱ第6版』，有斐閣）
「『大学の法律関係』の研究—国立大学法人における教育活動と国家賠償法1条の適用可能性を中心として」（単著，平成25年，『行政法研究3号』，信山社）
「ビックイベントと行政法」（単著，平成26年，『日本不動産学会誌』108号）
「学校及び在学関係の法的性質」（単著，平成26年，『行政法の争点』）
「地方公共団体の規律維持と債権放棄議決の意義—行政法総論からみた債権放棄議決」（単著，平成27年，『公法研究77号』）
「教育・研究における費用負担」（単著，平成28年，『法律時報』88巻2号）

4 学外での公的活動、社会貢献活動等

日本公法学会，警察政策学会に所属。退職手当審査会委員（内閣府）。埼玉県情報公開審査会委員。司法試験考査委員，行政書士試験委員，東京都青少年問題協議会委員，埼玉県個人情報保護審査会委員，モバイルコンテンツ審査・運用監視機構（EMA）基準策定委員等を歴任。

《専任教員》教授 富井 幸雄（憲法）

1 略歴

昭和57年 中央大学法学部法律学科卒業

昭和 59 年 中央大学大学院法学研究科修士課程修了・法学修士
昭和 62 年 中央大学大学院法学研究科博士後期課程中途退学
平成 2 年 University of Wisconsin-Madison, Law School 修士課程修了 (MLI)
平成 3 年 Indiana University-Bloomington, School of Law LL.M.
平成 8 年 大東文化大学国際関係学部専任講師
平成 11 年 大東文化大学国際関係学部助教授
平成 16 年 大東文化大学国際関係学部教授
平成 17 年 首都大学東京法科大学院教授
平成 25 年 University of Virginia School of Law, Visiting Scholar

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 23 年度 「憲法 1, 2」「憲法総合 1」「比較憲法」「アメリカ法」
平成 24 年度 「憲法 1, 2」「憲法総合 1」「比較憲法」「アメリカ法」
平成 25 年度 （特別研究期間）
平成 26 年度 「憲法 1, 2」「憲法総合 1」「比較憲法」「アメリカ法」
平成 27 年度 「憲法 1, 2」「憲法総合 1」「比較憲法」「アメリカ法」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「地方自治法読本 第 3 版」 (単著, 平成 24 年, 内外出版)
「海外派兵と議会—日本、アメリカ、カナダの比較憲法的考察」
(単著, 平成 25 年, 成文堂)

（2）論文

「アメリカ議会の戦争権限(一)(二)(三)(四)(五)」
(単著, 平成 22 年～24 年, 『法学会雑誌』 51 巻 1・2 号, 52 巻 1・2 号, 53 巻 1 号)
「アメリカ憲法と大規模災害—連邦緊急事態管理庁(FEMA)を中心として」
(単著, 平成 24 年, 『比較憲法学研究』 24 号)
「最高裁判所判事任命過程における議会の関与—カナダの展開と日本への示唆」
(単著, 平成 25 年, 『法学会雑誌』 53 巻 2 号)
「公務就任権—明治憲法 19 条の残影」
(単著, 平成 25 年, 『法学新報』 119 巻 7・8 号)
「カナダ憲法における条約締結権と議会—イギリス立憲主義のジレンマ」
(単著, 平成 25 年, 『法学新報』 119 巻 9・10 号)
「Targeted Killing の合憲性 (上)」 (単著, 平成 25 年, 『法学会雑誌』 54 巻 1 号)
「書評 松井茂記『カナダの憲法』」 (単著, 平成 25 年, 『年報カナダ研究』 2013 年号)
「Targeted Killing の合憲性 (下)」 (単著, 平成 26 年, 『法学会雑誌』 54 巻 2 号)
「FBI の安全保障請求状 (National Security Letters)」
(単著, 平成 26 年, 『法学会雑誌』 55 巻 1 号)
「カナダ最高裁の構成と立憲主義—カナダ最高裁判事任命無効判決」

- (単著, 平成 26 年, 『法学新報』 121 巻 5・6 号)
「アメリカの安全保障法学の体系—安全保障法学の予備的考察」
(単著, 平成 27 年, 『法学会雑誌』 55 巻 2 号)
「アメリカ憲法における国家承認権の所在—ジヴォトフスキー事件を素材として」
(単著, 平成 27 年, 『法学会雑誌』 56 巻 1 号)
「安全保障上の電子的監視—権力分立と合衆国憲法修正第 4 条の交錯」
(単著, 平成 27 年, 『法学新報』 122 巻 3・4 号)
「国家秘密特権—安全保障と司法権の一側面」
(単著, 平成 28 年 1 月, 『法学会雑誌』 56 巻 2 号)
カナダ憲法における包括的基本権—fundamental justice 原理の意味」
(単著, 平成 28 年 1 月, 『法学新報』 122 巻 7・8 号)

4 学外での公的活動・社会貢献活動等

防衛法学会理事。防衛省防衛研究所一般課程講師。航空自衛隊幹部学校講師。

参議院外交防衛委員会客員調査員, 衆議院安全保障委員会参考人, 板橋区情報公開個人情報保護審査会副会長, 桶川市情報公開個人情報保護審議会会長等を歴任。あきる野市情報公開・個人情報保護審査会会長, 板橋区情報公開個人情報保護審査会委員, 桶川市情報公開個人情報保護審議会会長, 大学設置基準協会法科大学院認証評価委員。

《専任教員》教授 野中 伸子（民事訴訟法・裁判実務・実務家教員）

1 略歴

平成 10 年 3 月 中央大学法学部卒業
平成 10 年 10 月 司法試験合格
平成 11 年 4 月 司法修習生（札幌）
平成 12 年 10 月 東京地裁判事補
平成 15 年 4 月 札幌地家裁室蘭支部判事補
平成 18 年 4 月 東京地裁判事補
平成 22 年 4 月 大阪地家裁堺支部判事補
平成 22 年 10 月 大阪地家裁堺支部判事
平成 25 年 4 月 東京地裁判事
平成 25 年 4 月 首都大学東京法科大学院教授

2 本法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 25 年度 「民事訴訟実務の基礎」「民事訴訟法総合 2」
平成 26 年度 「民事訴訟実務の基礎」「民事裁判演習」
平成 27 年度 「民事訴訟実務の基礎」「民事裁判演習」

《専任教員》教授 深津 健二（経済法・消費者法）

1 略歴

昭和 61 年 明治大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得
昭和 61 年 明治大学法学部教務助手補
昭和 63 年 東京都立商科短期大学専任講師
平成 3 年 東京都立商科短期大学助教授
平成 11 年 東京都立短期大学教授
平成 17 年 首都大学東京都市教養学部法学系教授
平成 26 年 首都大学東京法科大学院教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 24 年度 「消費者法」
平成 25 年度 「消費者法」
平成 26 年度 「消費者法」「独占禁止法 2」
平成 27 年度 「消費者法」「独占禁止法 1，2」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）論文

「消費者法の展開と権利＝法の実現—消費者及び消費者団体の役割を中心として」
（単著，平成 23 年，『法学会雑誌』51 巻 2 号）
「中小企業振興政策と競争法の活用—タイにおける流通問題に対する競争法の適用をめぐって」
（単著，平成 25 年，『法学会雑誌』53 巻 2 号）
「中小企業政策と競争法」
（単著，平成 26 年，『法学会雑誌』54 巻 2 号）
「中小企業政策と不当廉売規制」
（単著，平成 27 年，『法学会雑誌』55 巻 2 号）
「差別対価規制—中小企業政策としての意義と課題」
（単著，平成 27 年，『法学会雑誌』56 巻 1 号）
「中小企業と優越的地位の濫用規制—納入取引規制を中心として」
（単著，平成 28 年 1 月，『法学会雑誌』56 巻 2 号）

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

日本経済法学会会員，日本消費者法学会会員。
清瀬市商工会まちづくり委員会副会長，昭島市公民館運営審議会会長，府中市個人情報保護審査会委員。などを歴任。

《専任教員》教授 峰 ひろみ（刑事訴訟法・実務家教員）

1 略歴

平成 3 年 東京都立大学法学部法律学科卒業

平成 11 年 司法試験合格

平成 13 年 検事任官

平成 19 年 首都大学東京都市教養学部法学系（同法科大学院）教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 23 年度 「刑事訴訟法」「刑事訴訟実務の基礎」「模擬裁判」「法曹倫理」
「刑事裁判と事実認定」「刑事政策」

平成 24 年度 「刑事訴訟法」「刑事訴訟実務の基礎」「模擬裁判」「法曹倫理」
「刑事裁判と事実認定」「刑事政策」

平成 25 年度 「刑事訴訟法」「刑事訴訟実務の基礎」「模擬裁判」「法曹倫理」
「刑事裁判と事実認定」「刑事政策」

平成 26 年度 「刑事訴訟法」「刑事訴訟実務の基礎」「模擬裁判」「法曹倫理」
「刑事裁判と事実認定」「刑事政策」

平成 27 年度 「刑事訴訟法」「刑事訴訟実務の基礎」「模擬裁判」「法曹倫理」
「刑事裁判と事実認定」「刑事政策」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「ケースブック刑法 第 4 版」 （共著，平成 24 年，弘文堂）

「ケースブック刑事訴訟法 第 3 版」 （共著，平成 24 年，弘文堂）

「刑事訴訟実務の基礎 第 2 版」 （共著，平成 25 年，弘文堂）

「演習ノート 刑法総論 第 5 版」 （共著，平成 25 年，法学書院）

（2）論文

「捜査手続における違法を量刑上考慮することの当否について」

（単著，平成 24 年，『法学会雑誌』第 52 巻第 2 号）

「犯罪被害者と量刑－裁判員制度との関係に着目して－」

（単著，平成 25 年，『刑法雑誌』第 52 巻第 3 号）

「刑事手続における犯罪被害者情報の保護についての一考察」

（単著，平成 26 年『刑事法・医事法の新たな展開 下巻（町野朔先生古
稀記念論文集）』，信山社）

「秘密交通権と捜査・公判」 （単著，平成 26 年，『研修』798 号）

4 学外での公的活動，社会貢献活動

日本刑法学会会員。同会員としては，平成 24 年 5 月，日本刑法学会第 90 回大会・分
科会Ⅲ共同研究「犯罪被害者と量刑」において，報告者の一員として「犯罪被害者と量
刑－裁判員制度との関係に着目して－」という題目で報告を行った。また，平成 27 年 5
月，同学会第 93 回大会・ワークショップ「取調べの録音・録画と自白及び派生証拠の排
除」において，話題提供者の一員として実務における取調べの実態を踏まえ，取調べの
録音・録画が自白及び派生証拠の排除との関係でどのような影響を与えるかについて報

告を行った。

平成 24 年 9 月には、公益財団法人特別区協議会・首都大学東京オープンユニバーシティ共催特別講座（市民のための自治入門セミナー）において、「犯罪被害者の権利を考える～刑事裁判における犯罪被害者の過去・現在・未来～」という題目で一般市民向けの講義を行った。

その他、平成 22 年度より平成 26 年度まで警視庁留置施設視察委員，平成 24 年度より東京都食品安全情報評価委員，平成 25 年度より厚生労働省医道審議会委員，同省医療関係職種行政処分検討会議委員。平成 27 年 2 月 1 日から長野県子どもを性被害から守るための条例のモデル検討会委員。平成 27 年 4 月から文化庁宗教法人審議会委員を務める。

《専任教員》教授 三代川 三千代（民法・実務家教員）

1 略歴

昭和 46 年 お茶の水女子大学文教育学部卒業
昭和 49 年 東京大学大学院教育学研究科修士課程修了
昭和 51 年 司法試験合格
昭和 54 年 大阪地裁判事補
昭和 57 年 名古屋家地裁一宮支部判事補
昭和 60 年 新潟家地裁判事補
昭和 63 年 東京地裁判事補
平成元年 同判事
平成 6 年 司法研修所教官
平成 10 年 大阪地裁部総括判事
平成 13 年 東京地裁部総括判事
平成 19 年 千葉地裁部総括判事
平成 23 年 山口家裁所長
平成 26 年 首都大学東京法科大学院教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 26 年度 「民法総合 1， 2， 4」「法曹倫理」
平成 27 年度 「民法総合 1， 2， 4」「法曹倫理」

3 学外での公的活動及び社会貢献活動

裁判所職員倫理審査会委員，裁判所職員再就職等監視委員会委員（平成 28 年 2 月～）

《専任教員》教授 矢崎 淳司（商法）

1 略歴

平成 3 年 岡山大学法学部卒業
平成 11 年 大阪市立大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得退学
平成 12 年 東京都立短期大学専任講師
平成 13 年 コロンビア大学ロースクール客員研究員（文部科学省在外研究員）
平成 14 年 東京都立短期大学助教授
平成 17 年 首都大学東京都市教養学部法学系准教授
平成 19 年 首都大学東京都市教養学部法学系教授
平成 20 年 博士（法学）（大阪市立大学）
平成 23 年 コロンビア大学ロースクール客員研究員
平成 24 年 首都大学東京法科大学院教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 24 年度 「商法総合 3」
平成 25 年度 「商法総合 1， 2， 3」
平成 26 年度 「商法 1， 2」「商法総合 1， 3」
平成 27 年度 「商法 1， 2」「商法総合 1， 3」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「現代商取引法」 （共著，平成 23 年，弘文堂）
「会社法講義—会社法の仕組みと働き」 （共著，平成 26 年，日本評論社）

（2）論文

「四国銀行株主代表訴訟上告審判決」
（単著，平成 23 年，『法学会雑誌』 51 巻 2 号 287 頁）
「買収防衛策の適法性判断基準—新株予約権が利用された事例を素材として—」
（単著，平成 24 年，中央経済社，永井和之＝中島雅弘＝南保勝美編『会社法学の省察』 186 頁）
「アメリカにおけるポイズンピルをめぐる近時の動向」
（単著，平成 25 年，『法学会雑誌』 53 巻 2 号 69 頁）
「新株予約権行使条件変更をめぐる新株発行無効請求事件—全国保証株式会社上告審判決—」
（単著，平成 25 年，『ビジネス法務』 2013 年 5 月号 145 頁）
「アメリカにおけるキャッシュ・アウト」
（単著，平成 26 年，北村雅史＝高橋英治編『グローバル化の中の会社法改正』 221 頁，法律文化社）
「基準日後株主の全部取得条項付種類株式に係る取得価格決定申立て—セレブリックス事件—」
（単著，平成 27 年，『法学会雑誌』 55 巻 2 号 413 頁）

「募集株式の発行が「著しく不公正な方法」による発行ではないとされた事例—仙台地裁平成 26 年 3 月 26 日決定（金融・商事判例 1441 号 57 頁）」

（単著，平成 28 年 1 月，『法学会雑誌』56 卷 2 号 415－428 頁）

「退任役員に対する退職慰労金の不支給と会社及び代表取締役に対する損害賠償請求」

（単著，平成 28 年 3 月，判例セレクト 2015 [Ⅱ]（法教 426 号別冊付録）21 頁）

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

日本私法学会会員

公認会計士試験試験委員（企業法）

《専任教員》教授 我妻 学（民事訴訟法）

1 略歴

昭和 58 年 早稲田大学法学部卒業

昭和 60 年 一橋大学大学院法学研究科修士課程修了（修士）

昭和 63 年 一橋大学大学院法学研究科博士課程単位取得修了
東京都立大学法学部助教授

平成 15 年 東京都立大学法学部教授

平成 17 年 首都大学東京都市教養学部都市教養学科法学系教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 23 年度 「民事訴訟法 1，2」「民事訴訟法総合 1」

平成 24 年度 「民事訴訟法 1，2」「民事訴訟法総合 1」

平成 25 年度 「民事訴訟法 1，2」「民事訴訟法総合 1」

平成 26 年度 「民事訴訟法 2」「民事訴訟法総合 1，2」

平成 27 年度 「民事訴訟法総合 1，2」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「新法学講義 民事訴訟法」 （共著，平成 24 年，悠々社）

「新訂 鑑定からみた産科医療訴訟」

（共著（我妻 堯編著、箕浦 茂樹・我妻 学著），29 頁～76 頁，平成 25 年，日本評論社）

（2）論文

「医学研究における医療情報の保護」

（単著，平成 23 年，岩田太編『患者の権利と医療の安全』，ミネルヴァ書店）

「第三者による訴訟費用の提供」

- (単著、平成 24 年、法律文化社、『東北法学』71 号)
- 「産科医療補償制度と医療訴訟」 (単著、平成 24 年、『民事訴訟法雑誌』58 号)
- 「民事法律扶助の国際潮流」 (単著、平成 24 年、『総合法律支援論叢』第 2 号)
- 「イギリスにおける近時の民事法律扶助および訴訟費用の改正」
(単著、平成 25 年、『法学会雑誌』54 巻 1 号)
- 「手形の譲渡担保権者の地位」
(単著、平成 25 年、伊藤眞・松下淳一編『倒産判例百選 [第 5 版]』114 頁～115 頁、有斐閣)
- 「再審と再審事由」新堂幸司監修
(単著、平成 25 年、『実務民事訴訟講座 6 巻 [第 3 期]』、日本評論社)
- 「イギリスにおける法律専門職に対する秘匿特権と証拠の開示」
(単著、平成 26 年、『民事手続法の現代的機能』、信山社)
- 「権利能力のない社団の構成員全員に総有的に帰属する不動産につき所有権の登記名義人に対し当該社団の代表者個人名義に所有権移転手続を求める訴訟と当該社団の原告適格」
(単著、平成 27 年、『法の支配 176 号』)
- 「民事再生手続における再生債務者代理人の業務と報酬」
(単著、平成 27 年、『民事手続の現代的使命』、有斐閣)
- 「医療事故情報と医療訴訟」 (単著、平成 27 年、『民事責任の法理』、成文堂)

(3) 注釈書

- 園尾隆司＝小林秀之編・「条解民事再生法」
(単著、1001 頁～1012 頁 [総頁数 1344 頁]、平成 25 年、弘文堂)
- 松川＝本間＝西岡編著「新基本法コンメンタール人事訴訟法・家事事件手続法」
(単著、563 頁～576 頁 [総頁数 650 頁]、平成 25 年、日本評論社)

4 学外での公的活動，社会貢献活動等

東京簡易裁判所司法委員，厚生労働省医療情報データベース基盤整備事業推進検討会委員，産科医療補償制度審査委員会委員，平成 22 年度フルブライト研究員

《専任教員》准教授 手賀 寛（民事訴訟法）

1 略歴

平成 10 年 東京大学法学部卒業
 平成 12 年 東京大学大学院法学政治学研究科修士課程修了・修士（法学）取得
 平成 12 年（～平成 17 年）小竹・パートナーズ法律経営特許事務所パラリーガル
 平成 17 年 首都大学東京法科大学院リサーチ・アシスタント
 平成 18 年 首都大学東京法科大学院研究員（平成 20 年より助教に役職名変更）
 平成 21 年 首都大学東京都市教養学部法学系准教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去5年間の担当授業科目）

平成26年度 「民事訴訟法1」

平成27年度 「民事訴訟法1」

3 研究活動（過去5年間について）

（1）論文

Yasuhei Taniguchi, Yoshikazu Sagami, Hiroshi Tega and DBJEC, Civil Litigation in ZENTARO KITAGAWA EDS., 5 DOING BUSINESS IN JAPAN, §14.04, 14-57 – 14-143 (LexisNexis, Release 52) （共著, 2012年）

Hiroshi TEGA, [3] Civil Provisional Remedies in ZENTARO KITAGAWA EDS., 5 DOING BUSINESS IN JAPAN, §14.08, 14-278 – 14-301 (LexisNexis, Release 54) （単著, 2013年）

「国立大学法人が所持する文書の文書提出命令と民訴法220条4号ニ括弧書の類推適用」 （単著, 平成27年, 『法学教室』414号別冊判例セレクト2014Ⅱ 28頁）

「弁護士による代理 — 弁護士法25条違反」

（単著, 平成27年, 『民事訴訟法判例百選 [第5版]』100-101頁, 有斐閣）

（2）学会・研究会報告

International Association of Procedural Law XIVth World Congress (2011)
National Reporter of the Session “Arbitration between Law and Equity”
(General Report by Prof. Neil Andrews)

International Association of Procedural Law XVth World Congress (2015) National
Reporter of the Fourth Session “Coercive Measures Applied to Individuals”
(General Report by Prof. Teresa Armenta Deu)

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

日本民事訴訟法学会に所属。

文部科学省 大学改革推進等補助金 専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム 「法科大学院コア・カリキュラムの調査研究」実務基礎科目研究班 法曹倫理グループ委員（2009年より2010年）。

YASUHEI TANIGUCHI, PAULINE REICH AND HIROTO MIYAKE EDS, CIVIL PROCEDURE IN JAPAN (Juris Publishing, 2nd ed., 2002) (TAKA AKI HATTORI AND DAN FENNO HENDERSON 原著) 編集補佐（2007年より現在）

《兼任教員》教授 大杉 覚（行政学・都市行政論）

1 略歴

昭和 63 年 東京大学教養学部（相関社会科学）卒業
平成 8 年 成城大学法学部専任講師
平成 9 年 東京大学大学院総合文化研究科より博士（学術）取得
平成 11 年 東京都立大学法学部助教授
平成 17 年 首都大学東京都市教養学部法学系教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 27 年度 「政治学特殊授業 1」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

『シリーズ自治体政策法務講座 4 組織・人材育成』（共著，平成 25 年，ぎょうせい）
『人口減少時代の地域づくり読本』（共著，平成 27 年，公職研）
『交響する都市と農山村』（共著，平成 28 年，農文協）

（2）論文・判例評釈等

「『政策の窓』を開く自治体アウトソーシング」

（単著，平成 23 年，『季刊行政管理研究』No. 136 2011 年 12 月号 3-19 頁）

“The Current State and Future Prospects with regard to the Coordination of Central-Local Conflict in Japan”

（単著，平成 23 年，*2011 PCRD Conference Proceedings: Regional Development in Cooperation*, 2011, pp. 169-192）

「大都市制度をめぐる改革論議の課題と展望」

（単著，平成 23 年，『地方自治』第 761 号 2011 年 4 月号 2-23 頁，ぎょうせい）

“The Large City System of Japan” （単著，平成 23 年，*Papers on the Local Governance System and its implementation in Selected Fields in Japan No. 20*, Council of Local Authorities for International Relations (CLAIR)、Institute for Comparative Studies in Local Governance (COSLOG)、National Graduate Institute for Policy Studies (GRIPS)、March 2011, pp. 1-32）

「日本の大都市制度」

（単著，平成 23 年，『分野別自治制度及びその運用に関する説明資料 No. 20』財団法人 自治体国際化協会（CLAIR），政策研究大学院大学 比較地方自治研究センター（COSLOG）2011 年 3 月 1-24 頁）

「現場主義と自治体経営（3）」

（単著，平成 23 年，『月刊自治フォーラム』第 618 号 2011 年 3 月号 53-60 頁，第一法規）

- 「どこまで市民に任せられるか？～地方自治法改正をめぐる思想と流儀」
 （単著、平成 23 年、『月刊地方自治職員研修』614 号、2011 年 3 月号、14-16 頁、公職研）
- 「現場主義と自治体経営（2）」（単著、平成 23 年、『月刊自治フォーラム』第 617 号、2011 年 2 月号、61-68 頁、第一法規）
- 「人事行政研究の「実際化」と公務員制度改革～「ドイツ・イギリスにおける幹部国家公務員人事について」に参加して～」（単著、平成 23 年、『人事院月報』No. 738、2011 年 2 月号、10-13 頁）
- 「現場主義と自治体経営（1）」（単著、平成 23 年、『月刊自治フォーラム』第 616 号、2011 年 1 月号、58-66 頁、第一法規）
- 「自治体補助金改革の検証」（単著、平成 23 年、『都市問題』第 102 巻第 1 号、2011 年 1 月号、75 - 84 頁）
- 「指定管理者制度の目的志向的活用と自治体経営」（単著、平成 24 年、『月刊地方自治』2012 年 6 月号（No. 775）、2-16 頁、ぎょうせい）
- 「地方行政において期待される法曹の役割に関する研究」（単著、平成 24 年、（共著）日弁連法務研究財団編『法と実務 8』1-76 頁、商事法務）
- 「基盤行政としての『選挙行政』と 地方自治システムの変革」（単著、平成 24 年、『月刊選挙』2012 年 5 月号、3-8 頁）
- 「経営改革における管理職のリーダーシップ」（単著、平成 24 年、『月刊ガバナンス』2012 年 5 月号（133 号）、28-30 頁、ぎょうせい）
- 「分権時代の人材育成と人事管理～現場主義の人材育成を目指して～」（単著、平成 24 年、『HIYAKU』2012. 3、7-13 頁）
- 「比較を通じた人事行政・公務員制の原理への再接近～パネル・ディスカッションに参加して～」（単著、平成 24 年、『人事院月報』No. 750、2012 年 2 月号、8-11 頁）
- 「職員提案制度の課題～「主張 Voice」する自治体職員への期待」（単著、平成 24 年、『月刊地方自治職員研修』628 号、2012 年 2 月号、14-16 頁、公職研）
- 「アウトソーシングと自治体の責任」（単著、平成 25 年、『都市問題』2013 年 11 月号（104 号）、52-61 頁）
- 「『小都市』の展望と課題」（単著、平成 25 年、『月刊ガバナンス』2013 年 10 月号、14-17 頁、ぎょうせい）
- 「定住自立圏における連携と補完」（単著、平成 25 年、『都市とガバナンス』Vol. 20（2013 年 9 月）、18-26 頁、（一財）日本都市センター）
- 「行政学からみた自治体イノベーション」（単著、平成 25 年、『地方自治職員研修臨時増刊号 103』2013 年 7 月号（第 46 巻通巻 650 号）、11-21 頁、公職研）
- 「『人口減少』を踏まえた自治体組織・行政サービス」（単著、平成 25 年、『月刊ガバナンス』2013 年 6 月号、17-20 頁、ぎょうせい）
- 「地域担当制は何をもたらすのか」（単著、平成 25 年、『市政』2013 年 4 月号（62 号）、10-12 頁、（公財）全国市長会館）
- 「脱「やらされ感」に向けた職場マネジメントとコミュニケーション」（単著、平成 25 年、『NOMA 行政情報』No. 46、2013 年 4 月 1 日号、1-3 頁）

「都市制度再編の背景と行方」

(単著, 平成 25 年, 『月刊ガバナンス』 2013 年 2 月号 (142 号) 17-20 頁, (公財) 全国市長会館)

「地方自治体で活躍する法曹の役割」

(単著, 平成 26 年, 『ビジネス法務』 2014 年 3 月号 (Vol. 14 No. 3) 4-5 頁)

「都市制度再編と行政サービス」

(単著, 平成 26 年, 『月刊地方自治職員研修』 658 号 2014 年 1 月号 14-16 頁, 公職研)

「人口減少時代の自治体職員に求められるもの」

(単著, 平成 26 年, 『月刊ガバナンス』 2014 年 4 月号 14-17 頁, ぎょうせい)

「新たな広域連携への取組」

(単著, 平成 26 年, 『月刊地方議会人』 2014 年 8 月号 19-23 頁, 中央文化社)

「“自治体法曹”と自治体法務体制」

(単著, 平成 26 年, 『季刊自治体法務研究』 2014 年秋号 1 頁, ぎょうせい)

「『地方の知恵』を創出する職員組織」

(単著, 平成 26 年, 『月刊ガバナンス』 2014 年 10 月号 22-24 頁, ぎょうせい)

「任期付自治体法曹の登用と自治体行政の変革」

(単著, 平成 26 年, 『地方自治』 2014 年 12 月号 2-29 頁, ぎょうせい)

「人口減少社会における行政サービスと自治体経営」

(単著, 平成 26 年, 『公営企業』 2014 年 12 月号 2-10 頁, (一財) 地方財務協会)

「人口減少時代の自治体職員に求められる姿勢・能力と人事管理のあり方」

(単著, 平成 26 年, 『地方公務員月報』 2014 年 12 月号 (617 号) 2-15 頁)

「住民の幸福度を高める自治体組織」

(単著, 平成 27 年, 『月刊ガバナンス』 2015 年 2 月号 22-24 頁, ぎょうせい)

「人口減少時代の都市自治体職員像」

(単著, 平成 27 年, 『都市とガバナンス』 Vol. 23 (2015 年 2 月) 37-44 頁, (一財) 日本都市センター)

‘Overcoming “democratic deficit” problem in metropolis: large city reform and “intra-city decentralization” in Japan’

(単著, 平成 27 年, the proceeding for Korean Association for Local Government Studies)

「都市内分権と合併旧市町村」

(単著, 平成 27 年, 『月刊ガバナンス』 2015 年 12 月号 27-29 頁, ぎょうせい)

「地域自治組織の新たな潮流と可能性」

(単著, 平成 27 年, 『市政』 2015 年 11 月号 16-18 頁, (公財) 全国市長会館)

「自治体の計画と首長の構想力」

(単著, 平成 27 年, 『月刊ガバナンス』 2015 年 9 月号 25-27 頁, ぎょうせい)

「都市制度改革・自治体間連携とその選択」

(単著, 平成 27 年, 『月刊地方自治職員研修』 2015 年 9 月号 17-19 頁, 公職研)

「指定管理者制度の可能性と展望」

(単著、平成 27 年、『月刊指定管理者制度』2015 年 8 月号、7-11 頁)
「新人首長と自治体組織・風土」

(単著、平成 27 年、『月刊ガバナンス』2015 年 5 月号 21-23 頁、ぎょうせい)
「人口減少時代における地方創生と『都市と地方』」

(単著、平成 28 年、『都市社会研究』第 8 号 (2016 年 3 月) 1-18 頁)
「都市内分権と大都市ガバナンスの構想」

(単著、平成 28 年、『季刊行政管理研究』第 153 号 (2016 年 3 月) 4-15 頁)
「人事評価制度とその課題」

(単著、平成 28 年、『都市問題』2016 年 2 月号 (第 107 巻第 2 号) 68-75 頁)
「『人口減少自治体』の人口ビジョン」

(単著、平成 28 年、『月刊ガバナンス』2016 年 2 月号 23-25 頁、ぎょうせい)

(3) 学会・研究会報告

平成 26 年 6 月 25 日、D-Camp セミナー (韓国京畿道庁) において、「災害対策と危機管理：日本における震災経験と教訓」のテーマで報告。

平成 26 年 7 月 23 日、韓国地方自治学会日韓交流分科会・地方議会の活性化セッション (韓国光州特別市) において、「大都市制度改革と議会改革」のテーマで報告。

平成 26 年 11 月 22 日、「大気汚染における中日韓地方政府の環境協力国際シンポジウム」 (中国上海市復旦大学) において、「大都市東京の公害対策の歴史：美濃部都政初期を中心に」のテーマで報告。

平成 27 年 1 月 23 日、アジア分権改革研究会 (政策研究大学院大学) にて ‘The large city reform in Japan’ のテーマで報告。

平成 27 年 2 月 6 日、韓国地方自治学会国際交流分科会 (韓国アサン市) において、
‘Overcoming “democratic deficit” problem in metropolis: large city reform and “intra-city decentralization” in Japan’ のテーマで報告。

平成 27 年 7 月 14 日、自治体議会政策学会第 17 期自治政策講座 (横浜市) において、「人口減少期のまちづくり」のテーマで報告。

平成 27 年 7 月 25 日、ローカル・ガバナンス学会第 21 回研究会 (山梨学院大学) において、「人口減少社会における公共施設等の管理について」のテーマで報告。

平成 27 年 8 月 22 日、自治体学会奈良大会において「新たな広域連携の展開と持続可能な地域づくり」のテーマで報告。

平成 27 年 11 月 27 日、ソウル市立大学研究交流研究会 (韓国ソウル特別市) において、「遠隔自治体間連携の展開とその可能性」のテーマで報告。

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

東京都教育委員会委員 (H28-)

中央区公文書公開・個人情報保護審査会委員 (H12-現在)

財団法人特別区協議会特別区制度懇談会委員 (H20-現在)

財団法人自動車リサイクルセンター離島対策等検討会委員 (H16-現在)

政策研究大学院大学客員教授 (H17-現在)

東京都震災復興検討会議委員（H19-現在）

ほか各種の国・自治体の審議会・研究会委員など

《兼任教員》教授 長谷川 貴陽史（法社会学）

1 略歴

平成 6 年 東京大学法学部卒業

平成 8 年 東京大学大学院法学政治学研究科修士課程修了

平成 11 年 東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学

平成 16 年 法学博士（東京大学）

平成 16 年 北海道大学大学院法学研究科専任講師

平成 17 年 首都大学東京都市教養学部法学系准教授

平成 21 年 首都大学東京都市教養学部法学系教授

平成 22 年 カリフォルニア大学バークレー校・法と社会研究センター客員研究員

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 23 年度 「法社会学」

平成 24 年度 「法社会学」

平成 25 年度 「法社会学」

平成 26 年度 「法社会学」

平成 27 年度 「法社会学」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「居住における包摂と排除－野宿者の住所の剥奪と住宅困窮者の居住確保の事例から」

（共著，平成 23 年，『法社会学』74 号 64 頁）

「地区計画・建築協定の規制が戸建住宅価格に及ぼす影響」

（共著，平成 24 年，『都市住宅学』76 号 104 頁）

「居住における包摂と排除－「住所の確保」と「住居の提供」の日米事例比較から－」

（単著，平成 25 年，『新世代法政策学研究』20 号 307 頁）

「景観利益について－国立景観権訴訟上告審判決とその前後－」

（単著，平成 25 年，『都市住宅学』81 号 86 頁）

「都市計画法制における「管理」概念についての覚書」

（単著，平成 27 年 3 月，転換期を迎えた土地法制度研究会『転換期を迎えた土地法制度』一般財団法人土地総合研究所 90 頁）

「Comment on Roger Cotterrell」

（単著，平成 27 年，Kobe University Law Review, International Edition, No. 49, p. 257.）

(2) 学会・研究会報告

平成 24 年 2 月, 北海道大学大学院法学研究科グローバル COE プログラム『多元分散型統御を目指す新世代法政策学』環境法政策研究会において, 「ホームレスの排除と住所」のテーマで報告。

平成 24 年 6 月, 法と社会学会 (LSA) において, 「The Cumulative Effects of Excluding the Homeless from Social Systems: Issues and Resolutions」のテーマで報告。

平成 25 年 9 月, 国際法社会学会 (RCSL) において, 「A Sociological Observation of the Exclusion of the Homeless and Ways to Include them in Society」のテーマで報告。

平成 25 年 11 月, 日本不動産学会において, 「新たな土地空間マネジメント制度の構築に向けて～From Static to Dynamic, コントロールからマネジメントへ～」のテーマで報告 (共同報告)。

平成 26 年 4 月, 法理学会において, 「B. タマナハの法理論—ハート批判を素材として」のテーマで報告。

平成 26 年 5 月, 日本法社会学会学術大会において, 「Comment (Research Interest of Socio-legal Studies World-wide in Globalization: Measuring Japanese Sociology of Law)」のテーマで報告。

平成 26 年 5 月, 日本法社会学会学術大会において, 「B. Tamanaha の法概念と H. L. A. Hart 批判」のテーマで報告。

平成 26 年 5 月, IVR (法哲学・社会哲学国際学会連合) 日本支部/日本法哲学会・第 11 回神戸記念レクチャーにおいて, 「Comment: Brian Tamanaha's Conception of Law and his critiques of HLA Hart's Theory of Law」のテーマで報告。

平成 26 年 7 月, XVIII ISA World Congress of Sociology 2014 (国際社会学会) において, 「The Widening Disparity of Cities and Shrinking Districts in Tokyo」のテーマで報告。

平成 27 年 4 月, The Socio-legal studies Workshop (於 神戸大学) において, 「Comment on the lecture by Professor Roger Cotterrell」のテーマで報告。

4 学会での公的活動, 社会貢献活動

国際法社会学会 (RCSL) 理事, 法と社会学会 (Law & Society Association) 会員, アジア法と社会学会 (Asian Law and Society Association) 会員, 日本法社会学会理事・査読委員・編集委員, 都市住宅学会総務企画委員, 日本不動産学会会員, 日本公法学会会員, 日本寄せ場学会会員, 貧困研究会会員。

《兼任教員》教授 星 周一郎 (刑法・刑事訴訟法)

1 略歴

平成 4 年 東京都立大学法学部卒業

平成 9 年 東京都立大学大学院社会科学研究科基礎法学専攻博士課程単位取得退学

平成 9 年 東京都立大学法学部助手
平成 12 年 信州大学経済学部助教授
平成 15 年 コロンビア大学ロースクール（米国）客員研究員（～平成 16 年）
平成 17 年 学位取得（博士（法学）（東京都立大学））
平成 17 年 信州大学大学院法曹法務研究科助教授
平成 19 年 信州大学大学院法曹法務研究科准教授
平成 21 年 首都大学東京都市教養学部法学系教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 23 年度 「刑法 1」
平成 24 年度 「刑法 1」 「刑法 3」
平成 25 年度 「刑法 1」 「刑法 3」
平成 26 年度 「刑法 1」 「刑事訴訟法総合 2」
平成 27 年度 「刑法 1」 「刑事訴訟法総合 2」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「刑法総論判例インデックス」	（共著，平成 23 年，商事法務）
「ケースブック刑事訴訟法（第 3 版）」	（共著，平成 24 年，弘文堂）
「判例プラクティス刑法Ⅱ各論」	（共著，平成 24 年，信山社）
「新基本法コンメンタール刑法」	（共著，平成 24 年，日本評論社）
「防犯カメラと刑事手続」	（単著，平成 24 年，弘文堂）
「刑事訴訟法判例ノート（第 2 版）」	（共著，平成 26 年，弘文堂）
「ケースブック刑法（第 5 版）」	（共著，平成 27 年，弘文堂）

（2）論文

「街頭防犯カメラの現在－設置・管理・利用と法的規制の実態」
（単著，平成 23 年，『都市問題』102 巻 8 号）
「英米の犯罪体系論」
（単著，平成 24 年，『法律時報』84 巻 1 号）
「不正受給罪と詐欺罪－補助金・給付金等の不正取得に関する処罰規定の意義－」
（単著，平成 24 年，『法学会雑誌』52 巻 2 号）
「危険運転致死傷罪にいう『アルコールの影響により正常な運転が困難な状態』の意義」
（単著，平成 24 年，『ジュリスト』臨時増刊 1440 号平成 23 年度重要判例解説）
「危険な運転による致死傷と危険運転致死傷罪・自動車運転過失致死傷罪」
（単著，平成 24 年，『法学会雑誌』53 巻 1 号）
「詐欺罪と『詐欺隣接罰則』の罪数関係」
（単著，平成 25 年，『法学会雑誌』53 巻 2 号）
「パット・オマリー・犯罪とリスク（Pat O'Malley, Crime and Risk）の紹介」
（単著，平成 25 年，『理論刑法学⑥』）

「イギリス 2012 年自由保護法と街頭防犯カメラの規制」

(単著, 平成 25 年, 『法学会雑誌』 54 巻 1 号)

「カルテの改ざんと証拠隠滅罪—東京女子医大事件」

(単著, 平成 26 年, 『医事法判例百選〔第 2 版〕』)

「サイバー空間の脅威に対する情報共有組織の意義」

(単著, 平成 26 年, 『警察学論集』 67 巻 5 号)

「共犯と罪数」

(単著, 平成 26 年, 『刑法判例百選 I〔第 7 版〕』)

「建造物の現住性(1)」

(単著, 平成 26 年, 『刑法判例百選 II〔第 7 版〕』)

「マイケル・ジャクソンの急逝—アメリカにおける医療過誤に対する刑事法的対応・再論—」

(単著, 平成 27 年, 『法学会雑誌』 55 巻 2 号)

「危険運転致死傷罪の要件解釈のあり方と立法の動向」

(単著, 平成 27 年, 安廣文夫編著『裁判員裁判時代の刑事裁判』)

「外国機関との情報共有」 (単著, 平成 27 年, 大沢秀介監修『入門・安全と情報』)

「詐欺罪(特集『新時代の刑法』)」 (単著, 平成 27 年, 『法学教室』 418 号)

「事前予防と秩序違反行為の法的規制」(単著, 平成 27 年, 『刑法雑誌』 54 巻 3 号)

「サイバーセキュリティへの刑事法的対応に関する一考察」

(単著, 平成 27 年, 『法学会雑誌』 56 巻 1 号)

「アメリカにおける猶予制度」

(単著, 平成 27 年, 『論究ジュリスト』 14 号)

「犯罪の事前予防とその法的対応」 (単著, 平成 27 年, 『警察学論集』 68 巻 11 号)

「自動速度取締装置(オービスⅢ)による交通取締りの法的意義と機能」

(単著, 平成 28 年 1 月, 『法学会雑誌』 56 巻 2 号)

「公共の危険概念の展開—現代における放火罪と近時の立法をめぐって—」

(単著, 平成 28 年 2 月, 『刑事法ジャーナル』 47 号)

「犯罪の事前防止と刑事司法・警察活動の方向性」

(単著, 平成 28 年 3 月, 『警察政策』 18 巻)

(3) 学会・研究会報告

平成 24 年 5 月, 日本刑法学会 WS において, 「詐欺罪と特別法上の『詐欺隣接』罰則規定」のテーマで報告。

平成 25 年 9 月, 警察政策フォーラムにおいて, 「サイバー空間の脅威への対策における新たな展開—産学官連携への期待—」のテーマでパネリストとして報告。

平成 26 年 5 月, 日本刑法学会分科会Ⅲ「犯罪予防政策の総合的検討」において, 「事前予防と秩序違反行為の法的規制」のテーマで報告。

平成 26 年 5 月, 日本刑法学会 WS 8「執行猶予」において, 「アメリカにおける『刑の猶予』制度」のテーマで報告。

平成 26 年 9 月, 警察政策学会社会安全政策教育研究部会において, 「犯罪の事前予防とその法的対応」のテーマで報告。

平成 27 年 5 月, 日本刑法学会 WS 3「放火罪・公共危険犯」において, ワークショップ・オーガナイザーを担当。

平成 27 年 7 月, 警察政策フォーラムにおいて, 「犯罪の事前防止と刑事司法・警察

活動の方向性」のテーマでパネリストとして報告。

平成 28 年 2 月、平成 27 年度警察庁総合セキュリティ対策会議第 3 回会議において、
「サイバーセキュリティの向上と捜査情報の活用」のテーマで報告。

4 学外での公的活動，社会貢献活動等

日本刑法学会会員，警察政策学会会員，日本法令外国語訳推進会議構成員，一般社団法人日本サイバー犯罪対策センター理事，共通到達度確認試験試行試験試験委員，警察庁総合セキュリティ対策会議委員等を務める。

《兼任教員》准教授 天野 晋介（労働法）

1 略歴

平成 14 年 同志社大学法学部法律学科卒業・学士（法学）

平成 16 年 同志社大学大学院法学研究科博士課程（前期課程）修了・修士（法学）

平成 20 年 同志社大学大学院法学研究科博士課程（後期課程）単位取得退学

平成 20 年 首都大学東京都市教養学部法学系准教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 23 年度 「労働法」

平成 24 年度 「労働法」

平成 25 年度 「労働法」

平成 26 年度 「労働法」

平成 27 年度 「労働法」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「アメリカの有期労働契約法制」

（共著、平成 26 年，大内伸哉編『有期労働契約の法理と政策 法と経済・比較法の知見をいかして』所収，弘文堂）

「配転・出向・転籍」

（共著，平成 23 年，山川・森戸編『判例サムアップ労働法』所収，弘文堂）

（2）論文・判例評釈

①論文

「安全配慮義務違反と取締役に対する責任追及の可能性」

（単著，平成 23 年，『季刊労働法』236 号所収）

「アメリカ労働法」

（単著，平成 26 年，『季刊労働法』244 号所収）

②判例評釈

「飲酒運転を理由とする懲戒解雇の効力と退職金不支給処分の当否—日本郵便事件—」
(単著, 平成 26 年, 『平成 25 年度重要判例解説』所収, 有斐閣)

「私生活上の非違行為を理由とする退職金不支給の当否—NTT 東日本 (退職金請求) 事件」
(単著, 平成 27 年, 『法学会雑誌』所収, (首都大学東京紀要))

「裁量労働制 (専門型) の対象該当性～レガシィほか 1 社事件～」

(単著, 平成 26 年, 『日本労働法学会誌』124 号, 法律文化社) ※査読付き
「労働協約に団交事項としないことが明示されている場合の、団交申入れの拒否と不当労働行為の成否」
(単著, 平成 26 年, 『中央労働時報』1177 号)

(3) その他

「通勤途上災害」 (共著, 平成 26 年, 土田道夫編『労働法の争点』, 有斐閣)

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

神戸大学で行われた国際シンポジウム「解雇の規制手法の在り方についての国際比較—解雇の金銭解決を中心に—」において、アメリカの解雇法制についての報告を行った。
(平成 27 年)

野口智明「諸外国における解雇及び個別的労働関係の紛争処理の制度とその運用の実情」労働政策研究・研修機構の論文執筆の際のアドバイザーを担当した。(平成 27 年)

東京都監理団体研修において、「労働者派遣法と人事管理上の法的諸問題」というテーマで講演等を行った。(平成 26 年)

首都大学東京オープンユニバーシティの提供する市民講座において、「最近の雇用を巡る法的諸問題」というテーマで、4 回にわたり、講座講師を担当した。(平成 26 年)

東京都監理団体研修において、「労働契約法改正と高年齢者雇用安定法改正が人事管理に与える影響とその対応策」というテーマで講演等を行った。(平成 25 年)

株式会社浜銀総合研究所が、厚生労働省より受託した「平成 25 年度短時間労働者総合支援事業」のうち、「短時間正社員制度導入支援マニュアル改訂研究会」の委員を務めた。(平成 25 年)

東京都私学財団の退職資金事業加入者説明会において、「労働条件変更時の注意点について」というテーマで講演を行った。(平成 24 年)

首都大学東京オープンユニバーシティの提供する市民講座において、「今後、企業が講ずべき「働き方」とは」というテーマで、2011 年 3 月 11 日の大震災以降の電力需給の低下などに直面した我が国における企業活動の見直しにおいて問題となる法的論点について、講演を行った。(平成 23 年)

《兼任教員》准教授 尾崎 悠一 (商法)

1 略歴

平成 16 年 東京大学法学部卒業・学士 (法学)

平成 16 年 東京大学大学院法学政治学研究科助手
平成 19 年 首都大学東京都市教養学部法学系准教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 23 年度 「商法総合 3」
平成 24 年度 「商法 1, 2」
平成 25 年度 「商法 1, 2」「商法総合演習」
平成 26 年度 「商法総合 2」「商法総合演習」
平成 27 年度 「商法総合 2」「商法総合演習」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「論点体系会社法 3」 (共著, 平成 24 年, 第一法規)
「論点体系会社法 補巻」 (共著, 平成 27 年, 第一法規)

（2）論文

「取締役の法令遵守義務と第三者に対する責任—過払金返還請求権者に対する貸金業者代表取締役の責任」 (単著, 平成 23 年, 『ジュリスト』1422 号、有斐閣)

「全員出席総会と株主総会決議の不存在」
(単著, 平成 24 年, 『ジュリスト』1444 号、有斐閣)

「ドッド・フランク法制定後の米国における役員報酬規制の動向」
(単著, 平成 24 年, 神作裕之責任編集・公益財団法人資本市場研究会編『企業法
制の将来展望——資本市場制度の改革への提言——2013 年度版』, 財經詳報社)

「委任状勧誘規制違反と会社法上の効果 (1)」
(単著, 平成 25 年, 神田秀樹・神作裕之編『金融商品取引法判例百選』(別
冊ジュリスト 214 号), 有斐閣)

「機関投資家による議決権行使と議決権行使助言会社」
(単著, 平成 25 年, 岩原紳作・山下友信・神田秀樹編集代表『会社・金融・
法 (上巻)』, 商事法務)

「米国におけるクラウドファンディングに関する議論について」
(単著, 神作裕之責任編集・公益財団法人資本市場研究会編『企業法制の将来展
望——資本市場制度の改革への提言——2014 年度版』, 平成 25 年, 財經詳報社)

「機関 (特集・会社法改正のポイント)」
(単著, 平成 26 年, 『法学教室』402 号、有斐閣)

「わが国における非業務執行役員」 (単著, 平成 26 年, 『月刊監査役』625 号)
「種類株式発行会社における利害調整—米国の裁判例における定款による利害調整
と取締役の信認義務」

(単著, 平成 26 年, 落合誠一先生古稀記念論文集『商事法の新しい礎石』, 有斐閣)
「満期補充後のその他の手形要件の白地補充権の消滅事項」

(単著, 平成 26 年, 神田秀樹・神作裕之編『手形小切手判例百選』第 7 版)

(別冊ジュリスト 222 号), 有斐閣)

「利益相反取引・権限濫用による手形行為」

(単著, 平成 27 年, 『ジュリスト』1479 号 (平成 26 年度重要判例解説), 有斐閣)

「株主の権利・平等性の確保 (特集・完全理解コーポレートガバナンス・コード)」

(単著, 平成 27 年, 『企業会計』67 巻 7 号, 中央経済社)

「経営者の報酬 (特集・コーポレート・ガバナンス元年の株主総会)」

(単著, 平成 27 年, 『法学教室』421 号, 有斐閣)

4 学外での公的活動、社会貢献活動等

日本私法学会, 日本海法学会所属。

公益財団法人資本市場研究会委託調査研究委員, 公益社団法人日本監査役協会監査役制度問題研究会委員。

《兼担教員》准教授 門脇 雄貴 (行政法)

1 略歴

平成 11 年 東京大学法学部卒業

平成 13 年 東京大学大学院法学政治学研究科修士課程修了・修士 (法学)

平成 18 年 東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学

平成 18 年 首都大学東京都市教養学部法学系准教授

2 本学法科大学院における教育活動 (過去 5 年間の担当授業科目)

平成 23 年度 「行政法」「行政法総合 2」

平成 24 年度 「行政法」「行政法総合 2」

平成 25 年度 「行政法」「行政法総合 2」

平成 26 年度 「行政法」「行政法総合 2」

平成 27 年度 「行政法」「行政法総合 2」

3 研究活動 (過去 5 年間について)

(1) 論文

「ドイツにおける機関訴訟とその理論的基礎」 (単著, 平成 23 年, 『比較法研究』72 号)

「選挙告示の取消しを求める訴訟 (判例解説)」

(単著, 平成 24 年, 『別冊ジュリスト 212 号 行政判例百選Ⅱ [第 6 版]』, 有斐閣)

「長の関係私企業からの隔離 (判例解説)」

(単著, 平成 25 年, 『別冊ジュリスト 215 号 地方自治判例百選 [第 4 版]』, 有斐閣)

「滋賀県選挙管理委員会の委員長以外の委員について月額報酬制報酬を定める条例の規定と地方自治法 203 条の 2 第 2 項 (判例評釈)」

(単著, 平成 25 年, 『自治研究』89 巻 10 号)

「機関の権利と機関訴訟(一) —ドイツにおける機関訴訟論の現状—」

(単著, 平成 26 年, 『首都大学東京法学会雑誌』 55 巻 1 号)

「通達の法的性質」

(単著, 平成 26 年, 『ジュリスト増刊 新・法律学の争点シリーズ 8 行政法の争点[第 4 版]』, 有斐閣)

「第 23 条 行政庁の訴訟参加」

(単著, 平成 26 年, 南博方=高橋滋=市村陽典=山本隆司(編)『条解 行政事件訴訟法[第 4 版]』, 弘文堂)

「機関の権利と機関訴訟(二) —ドイツにおける機関訴訟論の現状—」

(単著, 平成 27 年, 『首都大学東京法学会雑誌』 55 巻 2 号)

「機関の権利と機関訴訟(三) —ドイツにおける機関訴訟論の現状—」

(単著, 平成 27 年, 『首都大学東京法学会雑誌』 56 巻 1 号)

4 学外での公的活動、社会貢献活動等

平成 27 年まで、多摩市情報公開・個人情報運営審議会委員、東京都建築審査会委員等を務める。

《兼担教員》准教授 北村 朋史（国際法）

1 略歴

平成 15 年 東京大学教養学部総合社会科学科卒業・学士（学術）

平成 17 年 東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻修士課程修了
・修士（学術）

平成 23 年 東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士課程単位取得退学

平成 23 年 首都大学東京都市教養学部法学系准教授

平成 26 年 博士（学術）（東京大学）

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 24 年度 「国際法 1」

平成 25 年度 「国際法 1」「国際法 2」

平成 26 年度 「国際法 1」「国際法 2」

平成 27 年度 「国際法 1」「国際法 2」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）論文

「国際法上の緊急避難に関する一考察：二つの緊急避難と国家責任条文二五条の意味（上）」（平成 27 年, 『法学会雑誌』 55 巻 2 号）

「国際法上の緊急避難に関する一考察：二つの緊急避難と国家責任条文二五条の意味（下・二）」（平成 27 年, 『法学会雑誌』 56 巻 1 号）

「国際法上の緊急避難に関する一考察：二つの緊急避難と国家責任条文二五条の意

味（下・二）」（平成 28 年 1 月、『法学会雑誌』56 巻 2 号）
「WTO 協定：貿易の拡大を通じた世界経済の発展」
（平成 28 年 2 月、『法学教室』425 号）

（3）判例評釈

「北朝鮮ベルヌ条約事件：未承認国に対する多数国間条約上の権利義務」
（平成 25 年、『平成 24 年度重要判例解説（ジュリスト臨時増刊）』）
「米国の特定国からの輸入に係るラベリング要求（21.5 パネル）」
（平成 26 年、『WTO パネル・上級委員会報告書に関する調査報告書 2014 年度版』）
〈http://www.meti.go.jp/policy/trade_policy/wto/ds/panel/panelreport.html〉

4 学外での公的活動、社会貢献活動等

国際法学会研究大会運営委員会委員，日本国際法協会国際法調査員、経済産業省 WTO
パネル・上級委員会報告書研究会委員

《兼任教員》准教授 木村 草太（憲法）

1 略歴

平成 15 年 東京大学法学部卒業・学士（法学）
平成 15 年 東京大学法学政治学研究科助手（憲法専攻）
平成 18 年 首都大学東京都市教養学部法学系准教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 23 年度 「憲法総合 2」「情報法」「公法総合演習」
平成 24 年度 「憲法総合 2」「情報法」「公法総合演習」
平成 25 年度 「憲法総合 2」「情報法」「公法総合演習」
平成 26 年度 「憲法総合 2」「情報法」「公法総合演習」
平成 27 年度 「憲法総合 2」「公法総合演習」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「憲法の急所——権利論を組み立てる」	（単著，平成 23 年，羽鳥書店）
「キヨミズ准教授の法学入門」	（単著，平成 24 年，星海社）
「憲法の創造力」	（単著，平成 25 年，NHK 出版）
「テレビが伝えない憲法の話」	（単著，平成 26 年，PHP）
「未完の憲法」	（共著，平成 26 年，潮出版）
「憲法学再入門」	（共著，平成 26 年，有斐閣）
「憲法の条件」	（共著，平成 27 年，NHK 出版）
「集团的自衛権はなぜ違憲なのか」	（単著，平成 27 年 8 月、晶文社）

「検証 安保法案」

(共著、平成 27 年 8 月、有斐閣)

(2) 論文

「空知太神社事件上告審判決」 (単著、平成 23 年、『自治研究』第 87 巻第 4 号)

「国民の意思と人格——帰報：統治機構の、いや法学の基礎知識」

(単著、平成 24 年、『法学教室』379 号)

「民法 900 条 4 号ただし書前段と平等原則」

(単著、平成 24 年、『ジュリスト』1440 号・平成 23 年度重要判例解説)

「政治の領域における国会と内閣——主権者国民と権力分立とではどっちが偉いのか？」

(単著、平成 24 年、『法学教室』381 号)

「シンポジウム 復興の原理としての法、そして建築 Part 1・2」

(共著、平成 24 年、『法学セミナー』690・691 号)

「法の領域における国会と内閣——法の支配のプロジェクト」

(単著、平成 24 年、『法学教室』383 号)

「第四部 復興と再生 復興の原理としての法、そして建築」

(共著、平成 24 年、『別冊法学セミナー 3.11 で考える日本社会と国家の現在』)

「法の領域における裁判所——暗闇での裁判官の華麗な跳躍」

(単著、平成 24 年、『法学教室』385 号)

「近時の判例の動向から～公務員の懲戒処分を巡って～」

(単著、平成 24 年、『地方公務員月報』2012 年 11 月号)

「独立性のある行政機関——委員会、裁判所、そして専門職」

(単著、平成 24 年、『法学教室』387 号)

「国旗国歌訴訟上告審判決」

(単著、法学教室 2013 年 2 月号付録、判例セレクト 2012[I])

「憲法の妥当性と憲法保障——なぜ君は頭からコーヒーをかぶらないのか？」

(単著、平成 25 年、『法学教室』389 号)

「公務員の政治的行為の規制について——大阪市条例と平成 24 年最高裁二判決」

(単著、平成 25 年、『法律時報』85 巻 2 号)

「憲法判断の方法——『それでもなお』の憲法理論」

(単著、平成 25 年、高橋和之先生古期記念『現代立憲主義の諸相』、有斐閣)

「立法過程の法的統制——立法裁量・立法目的・立法事実」

(単著、平成 25 年、憲法理論研究会編『憲法理論研究会叢書② 変動する社会と憲法』、啓文堂)

「〈徹底討論〉戦後の憲法報道は『合理的な議論が可能な土壌』を作る努力が足りなかった」

(共著、平成 25 年、Journalism no. 281)

「公安条例の明確性——徳島市公安条例事件」

(単著、平成 25 年、『憲法判例百選 I (第六版)・別冊ジュリスト 217 号』)

「外国人の出国の自由」

(単著、平成 25 年、『憲法判例百選 I (第六版)・別冊ジュリスト 217 号』)

「公務員の政治的行為と懲戒処分」

(単著, 平成 25 年, 『憲法判例百選 I (第六版)・別冊ジュリスト 217 号』)
「国民投票・住民投票の条件——憲法 96 条改憲論と小平市住民投票」
(単著, 平成 25 年, 『at プラス』17 号)
「憲法の変容——憲法改正・抵抗権・国家緊急権」
(単著, 平成 25 年, 南野森編『憲法学の世界』日本評論社)
「法の下での平等——差別の問題と厳格審査の理論」
(単著, 平成 25 年, 南野森編『憲法学の世界』日本評論社)
「租税判例速報 神奈川県臨時特例企業税条例事件上告審判決——最一判平成 25・3・21」
(単著, 平成 25 年, 『ジュリスト』1456 号)
「建築と景観」 (単著, 平成 25 年, 『建築雑誌』128 集 1645 号)
「PTA 改革、憲法の視点から」 (単著, 平成 25 年, 朝日新聞 4 月 23 日朝刊)
「憲法・統治機構法の課題」 (単著, 平成 25 年, 『ビジネス法務』2013 年 4 月号)
「特定秘密保護法の制定過程が示すもの」 (単著, 平成 25 年, 『at プラス』19 号)
「目標が不明確な改憲は『NO』。いまこそ憲法が実現する価値を再認識すべきである」
(単著, 平成 26 年, 『2014 年の論点』(文芸春秋))
「憲法 9 条の機能と意義——国家の実力行使の諸類型と憲法」
(単著, 平成 26 年, 『論究ジュリスト』9 号)
「法律家に必要なこと——イスラム教徒情報収集事件を素材に」
(単著, 平成 26 年, 『月報司法書士』507 号)
「論文式試験問題公法系〔第 1 問〕(特集 司法試験問題の検討 2015(Part. 2))」
(共著, 平成 27 年, 法学セミナー 60 巻 9 号)
「講演録 住民投票なくして「辺野古新基地建設」はあり得ない」
(単著, 平成 27 年, 世界 870 号)
「解散・総選挙に関わる憲法論をどう報じるべきか(特集 選挙報道はどう変わるべきか)」
(単著, 平成 27 年, Journalism 299)
「憲法を使いこなすく特別座談会」(特集 憲法の考察)」
(共著, 平成 27 年, Law & Practice (早稲田大学大学院) 9)
「第 14 修正の起草者ビンガムの生涯」(単著, 平成 27 年, アメリカ法 2015 年 2 号)
「集团的自衛権と 7・1 閣議決定」 (単著, 平成 27 年, 論究ジュリスト 13 号)
「非嫡出子の法定相続分の 2 分の 1 とする民法の規定を違憲とする最高裁決定について」
(単著, 平成 27 年, 東京司法書士会判例・先例研究平成 26 年版)
「最新判例批評〔2016〕1) 東京都議会議員選挙の選挙区及び選挙区ごとの議員定数に関する条例が適法・合憲とされた事例〔最高裁第一小法廷平成 27. 1. 15 判決〕(判例評論(第 683 号))」
(単著, 平成 28 年 1 月, 判例時報 2274 号)

4 学外での公的活動, 社会貢献活動等

日本公法学会, 全国憲法研究会, 憲法理論研究会会員。

全国憲法研究会企画委員及び同事務局員等を務める。

参議院第三特別調査室特別研究員, 共同通信政経懇話会講師, 選挙法制研究会, 目黒区人権講座講師, 三鷹市憲法講座講師, 多摩市情報公開・個人情報保護審査会委員, 八王子市倫理審

査会委員，相模原市新人研修講師，八王子市情報公開・個人情報保護審査会委員，21 世紀地方自治制度についての調査研究会委員，テレビ朝日報道ステーションレギュラーコメンテーターを務める。

《兼任教員》准教授 作内良平（民法）

1 略歴

平成 15 年 東京大学法学部卒業
平成 18 年 東京大学大学院法学政治学研究科修士課程修了・修士（法学）
平成 21 年 東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学
平成 21 年 首都大学東京都市教養学部法学系准教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 23 年度 「民法演習」
平成 24 年度 「民法演習」
平成 25 年度 「民法演習」
平成 26 年度 「民法演習」
平成 27 年度 「民法演習」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）論文

「連鎖する請負契約における入金リンク条項の解釈」
（単著，平成 25 年，『法学会雑誌』53 巻 2 号 313-327 頁）
「建築基準法違反の建物の建築を目的とする請負契約の効力と公序良俗」
（単著，平成 25 年，『法学会雑誌』54 巻 1 号 635-652 頁）
「破産法 54 条項の損害賠償請求権を自働債権とする注文者からの相殺の可否」
（単著，平成 26 年，『法学会雑誌』54 巻 2 号 295-313 頁）
「遺産分割と登記」
（単著，平成 27 年，大村敦志・水野紀子編『民法判例百選 III』（有斐閣）144-145 頁）
イヴ＝マリ・レティエ／作内良平「契約の履行と裁判官」
（平成 27 年，法律時報 87 巻 7 号 71-73 頁）

《兼任教員》准教授 谷口 功一（法哲学）

1 略歴

平成 17 年 東京大学大学院 法学政治学研究科 博士課程 単位取得退学
平成 17 年 首都大学東京都市教養学部法学系准教授

2 本法科大学院における教育活動（過去5年間の担当授業科目）

平成23年度 「法哲学」

平成25年度 「法哲学」

平成26年度 「法哲学」

平成27年度 「法哲学」

3 研究活動（過去5年間について）

（1）著書

「ショッピングモールの法哲学—市場、共同体、そして徳」

（単著，平成27年2月，白水社）

（2）論文

「グローバリゼーションと共同体の運命」

（単著，平成23年，『法哲学年報2011』，有斐閣）

「サンデル現象からの《共同体》論・再考」

（単著，平成23年，『法学セミナー』No.677，日本評論社）

「法哲学の観点から」

（単著，平成25年，『性同一性障害と医療・法』，メディカル出版）

「フィロソフィア・アポカリプシス」

（単著，平成25年，『ユリイカ』2月号，青土社）

「ミル・代議制・中国」

（単著，平成26年，井上達夫編『立法学のフロンティア』第1巻，ナカニシヤ出版）

「郊外の多文化主義」

（単著，平成26年，『アステイオン』83号，CCCメディアハウス）

「『共生の作法』——円環の潤い」

（単著，平成26年，谷口他編『逞しきリベラリストとその批判者たち——
井上達夫の法哲学』ナカニシヤ出版）

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

IVR（法哲学・社会哲学国際学会連合）

法科大学院適性試験作問委員

《兼担教員》准教授 種村 佑介（国際私法）

1 略歴

2006年 金沢大学法学部法学科卒業

2008年 早稲田大学大学院法学研究科修士課程修了，修士（法学）

2011年 早稲田大学大学院法学研究科博士後期課程修了，博士（法学）

2011年 一般財団法人知的財産研究所特別研究員

2012年 首都大学東京都市教養学部法学系准教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去5年間の担当授業科目）

平成25年度 「国際私法」「国際取引法」

平成26年度 「国際私法」「国際取引法」

平成27年度 「国際私法」「国際取引法」

3 研究活動（過去5年間について）

（1）著書

青木清＝佐野寛編「国際＜家族と法＞」

（共著，2012年，八千代出版，96-101頁〔第16講「非嫡出子」部分の執筆〕）

（2）論文

「いわゆる『モザンビーク・ルール』について」

（単著，2012年，『早稲田法学』87巻3号91-130頁）

「外国知的財産権侵害訴訟における国際裁判管轄権の制限」

（単著，2012年，『国際商取引学会年報』14号90-100頁）

「ダイシーの国際私法理論に関する一考察—国内法説、既得権説を中心に」

（単著，2014年，『法学会雑誌』54巻2号135-167頁）

「イングランドにおける『既得権』説の克服と『不法行為のプロパー・ロー』」

（単著，2014年，『国際私法年報』15号140-167頁）

「法の適用に関する通則法22条の適用について」

（単著，2015年，『法学会雑誌』56巻1号633-663頁）

（3）判例評釈

「在日韓国・朝鮮人の相続準拠法—東京地判平成23・6・7（涉外判例研究第615回）」

（2013年，『ジュリスト』1451号124-127頁）

「公海上の船舶事故に関する荷送人の不法行為責任の準拠法—東京高判平成25・2・28（涉外判例研究第623回）」

（2014年，『ジュリスト』1464号136-139頁）

「韓国テレビ番組のネット配信と著作権侵害訴訟の国際裁判管轄・準拠法—東京地判平成26・7・16」

（2015年，『新・判例解説 Watch』16号337-340頁）

「インターネット上の名誉・信用毀損と国際裁判管轄—東京地判平成25・10・21」

（2015年，『平成26年度重要判例解説』308-309頁）

「ナイジェリア人の相続問題と反致、準拠外国法の不明—大阪地判平成25・3・21

（涉外判例研究第633回）」（2015年，『ジュリスト』1480号131-134頁）

（4）その他

「知的財産権侵害の準拠法と不法行為準拠法との関係」

（一般財団法人知的財産研究所，2012年，特許庁委託平成22年度産業財産権研究推進事業（平成22-24年度）報告書1-30頁）

「2012年主要文献目録」

(申美穂との共著, 2013 年, 『国際法外交雑誌』112 巻 2 号 362-384 頁, 「2 国際私法」部分の執筆)

「2013 年主要文献目録」

(松永詩乃美との共著, 2014 年, 『国際法外交雑誌』113 巻 2 号 257-274 頁, 「2 国際私法」部分の執筆)

「Kokusai Keizai Ho Koza II—Torihiki, Zaisan, Tetsuzuki [International Economic Law II: Transactions, Property and Procedure] edited by Japan Association of International Economic Law, represented by Noboru Kashiwagi」
(2015 年, Japanese Yearbook of International Law, Vol. 58, 409-414 頁)

(5) 学会・研究会報告

2014 年 9 月, 国際法学会 2014 年度 (第 117 年次) 研究大会において「涉外不法行為における法廷地法の累積的適用」のテーマで報告。

2015 年 12 月, 涉外判例研究会において「名誉・信用毀損、および不貞行為の国際裁判管轄と準拠法」のテーマで報告

2015 年 12 月, 関西国際私法研究会において「国際法違反の不法行為と国際私法」のテーマで報告

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

2014 年 12 月～現在 国際私法学会研究大会設営委員

2012 年 9 月～現在 青山学院大学法学部非常勤講師「国際取引法 B／Ⅱ」の担当

《兼任教員》准教授 西貝 小名都 (憲法)

1 略歴

平成 20 年 慶應義塾大学法学部法律学科卒業・学士 (法学)

平成 22 年 東京大学法学政治学研究科法曹養成専攻修了・法務博士 (専門職)

平成 22 年 東京大学法学政治学研究科助教

平成 25 年 現職

2 本学法科大学院における教育活動 (過去 5 年間の担当授業科目)

平成 25 年度 「地方自治法」

平成 26 年度 「地方自治法」

平成 27 年度 「地方自治法」「情報法」「憲法総合 2」

3 研究活動 (過去 5 年間について)

(1) 著書、論文

論文・判例評釈等

「参議院議員定数配分規定の合憲性」

(単著, 平成 23 年, 『法学協会雑誌』 128 巻 5 号 1338 頁)
「住基ネット合憲判決」 (単著, 平成 23 年, 『自治研究』 87 巻 9 号)
「Monica Brito Vieira and David Runciman, Representation (Cambridge: Polity, 2008, XI + 213 pp.)」 (単著, 平成 23 年, 『国家学会雑誌』 124 巻 11・12 号)
「Representation without Interpreter」
(単著, 平成 28 年, Percorsi costituzionali, 2015 3)

(2) 学会・研究会報告

平成 26 年 6 月, 国際憲法学会 (ノルウェー, オスロにて開催) において, 「The Media in distinction」のテーマで報告。

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

公法学会会員

全国憲法研究会会員

多摩市情報公開・個人情報保護運営審議会委員

総務省行政課 21 世紀地方自治制度研究会委員 (2017 年 1 月まで)

《兼任教員》准教授 堀田 周吾 (刑事訴訟法)

1 略歴

平成 13 年 東京都立大学法学部法律学科卒業

平成 15 年 東京都立大学社会科学部基礎法学専攻修士・修士 (法学)

平成 16 年 東京都立大学法学部法律学科助手

平成 17 年 首都大学東京都市教養学部法学系研究員

平成 19 年 駿河台大学法学部専任講師

平成 22 年 駿河台大学法学部准教授

平成 23 年 首都大学東京都市教養学部法学系准教授

2 本学法科大学院における教育活動 (過去 5 年間の担当授業科目)

平成 23 年度 「刑事訴訟法総合」

平成 24 年度 「刑事訴訟法総合」

平成 25 年度 「刑事訴訟法総合」

平成 26 年度 「刑事訴訟法総合 1」

平成 27 年度 「刑事訴訟法総合 1」

3 研究活動 (過去 5 年間について)

(1) 著書

渥美東洋＝椎橋隆幸編「刑事訴訟法 基本判例解説」 (共著, 平成24年, 信山社)

「ケースブック刑事訴訟法 第3版」 (共著, 平成24年, 弘文堂)

「ケースブック刑法 第5版」

(共著, 平成24年, 弘文堂)

(2) 論文

「取調べの録音・録画と被疑者の権利」

(単著, 平成24年, 『法学会雑誌』52巻2号)

「取調べの録音・録画と合衆国裁判所の監督権」

(単著, 平成24年, 『法学会雑誌』53巻1号)

「取調べの可視化」

(単著, 平成25年, 『法学セミナー』698号)

「多様な捜査手段と被疑者取調べの今後」 (単著, 平成25年, 『警察政策』15巻)

「ミランダ・ルールと任意性テスト (一)」

(単著, 平成25年, 『法学会雑誌』54巻1号)

「ミランダ・ルールと任意性テスト (二)」

(単著, 平成26年, 『法学会雑誌』54巻2号)

「被疑者の取調べ」

(単著, 平成26年, 『法学教室』411号)

「サイバー空間における犯罪捜査とプライバシー」

(単著, 平成27年, 『法学会雑誌』56巻1号)

「ミランダ・ルールと任意性テスト (三・完)」

(単著, 平成28年1月, 『法学会雑誌』56巻2号)

4 学外での公的活動、社会貢献活動等

「警察が設置する街頭防犯カメラシステムに関する研究会」法的WG (平成21～22年)

「保険金犯罪・不正請求等防止対策タスクフォース」委員 (平成24～25年)

《兼任教員》准教授 山科 麻衣 (刑法・刑事訴訟法)

1 略歴

平成22年 首都大学東京都市教養学部法学系法律学コース卒業

平成24年 首都大学東京法科大学院 (社会科学研究科法曹養成専攻課程) 修了・法務博士取得

平成24年 首都大学東京法科大学院 助教着任

平成27年 首都大学東京都市教養学部法学系 准教授着任

2 本学法科大学院における教育活動 (過去5年間の担当授業科目)

平成27年度 「刑法2, 3」

3 研究活動 (過去5年間について)

(1) 論文・判例評釈等

「イギリス一九八一年偽造法の『虚偽』文書概念とその拡大 (一)」

(単著, 平成25年, 『法学会雑誌』54巻1号551頁 - 582頁)

- 「イギリス一九八一年偽造法の『虚偽』文書概念とその拡大（二・完）」
（単著，平成 26 年，『法学会雑誌』54 巻 2 号 199 頁 - 233 頁）
- 「イギリスにおける文書偽造罪の変遷 - 財産的性格と『文書の真正』 - 」
（単著，平成 26 年，『法学会雑誌』55 巻 1 号 167 頁 - 203 頁）
- 「文書偽造罪における『人格』の偽りと重要な属性」
（単著，平成 27 年，法学会雑誌 56 巻 1 号 695 頁 - 736 頁）

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

首都大学東京法科大学院の卒業生団体である晴海会の行う講演会等の開催に協力すること社会貢献活動を行っている。

《兼任教員》講師 石口 修（民法）

1 略歴

昭和 57 年 中央大学商学部卒業
昭和 61 年 中央大学法学部卒業
平成元 年 専修大学大学院法学研究科修士課程修了・法学修士取得
平成 20 年 広島大学・博士（法学）取得（論文博士）
平成 12 年 九州産業大学経済学部専任講師
平成 15 年 同大学経済学部助教授
平成 16 年 久留米大学法学部教授
平成 16 年 同大学法科大学院教授
平成 20 年 福岡大学法科大学院教授
平成 23 年 愛知大学法科大学院教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 27 年度 「民法 3」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「基本レクチャー民法Ⅰ 民法総則・物権 初版増訂 3 刷」
（単著，2012 年，JA 全中教育部）

「基本レクチャー民法Ⅱ 担保物権・債権総論 初版増訂 3 刷」
（単著，2012 年，JA 全中教育部）

『物権法—民法講論第 2 巻』
（単著，2015 年 6 月，信山社、）

（2）論文・判例評釈等

「『真正な登記名義の回復』による中間省略登記—最判平成 22 年 12 月 16 日を契機として—」

(単著, 2012 年, 愛知大学『法経論集』第 192 号 P. 85—P. 139, 愛知大学法学会)
「取得時効完成後の抵当権設定と再取得時効の成否—最二小判平成 24 年 3 月 16 日—」

(単著, 2013 年, 愛知大学『法経論集』第 194 号 P. 71—P. 130, 愛知大学法学会)
「留保所有権の譲渡と譲受人の法的地位—最判平成 22 年 6 月 4 日の再検討・日独比較法の観点から—」

(単著, 2013 年, 『千葉大学法学論集』第 28 巻第 1・2 号 P. 39—P. 92, 千葉大学法学会)
「借家権・看板設置権と不動産所有権との関係について (前編) —所有権の行使に対する制限法理の一適用—」

(単著, 2014 年, 愛知大学『法経論集』第 199 号 P. 35—P. 107, 愛知大学法学会)
「対抗問題論—民法第 177 条の『第三者』」

(単著, 2015 年, 平井一雄・清水元編『日本民法学史・続編』P. 149—P. 192, 信山社)

(3) 学会・研究会報告

平成 23 年 4 月 第 75 回最新判例研究会 (於: 法政大学富士見町校舎) 「留保所有権の譲渡と譲受人の地位」のテーマで報告。

平成 24 年 4 月 第 85 回最新判例研究会 (於: 法政大学富士見町校舎) 「真正な登記名義の回復を登記原因とする中間省略登記の可否」のテーマで報告。

平成 24 年 12 月 第 92 回最新判例研究会 (於: 法政大学富士見町校舎 80 年館 7 階大会議室 (丸)) 「取得時効完成後の抵当権設定と再取得時効の成否」のテーマで報告。

平成 25 年 9 月 ドイツ民法研究会 (於: 学習院大学東 2 号館 8 階第 1 会議室) 「留保所有権の譲渡と譲受人の法的地位—日独比較法の観点から—」のテーマで報告。

平成 25 年 10 月 第 100 回最新判例研究会 (於: 法政大学 80 年館 7 階大会議室 (丸)) 「賃借人が賃借建物以外に設置した賃貸人の承諾に係る看板に対する建物譲受人の撤去請求と権利濫用—最三小判平成 25 年 4 月 9 日—」のテーマで報告。

平成 27 年 4 月 第 115 回最新判例研究会 (於: 法政大学 80 年館 7 階大会議室 (丸)) 「無限連鎖講に基づく配当金の支払と不法原因給付の成否—最三小判平成 26 年 10 月 28 日—」のテーマで報告。

平成 27 年 5 月 第 61 回現代担保法・財産法研究会 (於: 明治大学駿河台校舎・グローバルフロント 3 階 403D 演習室) 「留保所有権ないし留保所有者の地位の譲渡と譲受人の法的地位—ドイツ連邦通常裁判所 2008 年 3 月 27 日判決の検討—」のテーマで報告。

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

日弁連法務研究財団 法科大学院認証評価員 (2005 年 10 月～現在)

全国農業協同組合中央会 監査士資格試験委員 (2007 年 4 月～現在)

全国農業協同組合中央会 内部監査士検定試験委員 (2007 年 4 月～現在)

全国農業協同組合中央会 監査士実務補習研究報告審査委員 (2007 年 6 月～現在)

《兼任教員》講師 石田 拓時（弁護士実務・実務家教員）

1 略歴

平成 7 年 早稲田大学商学部卒業

平成 17 年 司法試験合格

平成 18 年 東京都立大学大学院社会科学研究科法曹養成専攻修了

平成 19 年 弁護士登録（四谷共同法律事務所）

2 本法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 24 年度 「法文書作成」

平成 25 年度 「法文書作成」

平成 26 年度 「法文書作成」

平成 27 年度 「法学入門演習」「民事法入門演習」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「インターネット消費者相談 Q&A（第 4 版）」（共著，平成 26 年，民事法研究会）

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

公益財団法人暴力団追放運動推進都民センター「不当要求防止責任者講習」講師
（平成 25 年度～）

《兼任教員》講師 石野 能之（弁護士実務・実務家教員）

1 略歴

平成 12 年 立教大学法学部卒業

平成 19 年 首都大学東京大学院社会科学研究科専門職学位課程修了・
専門職（法務博士）取得

平成 19 年 司法試験合格

平成 21 年 弁護士登録

平成 21 年 ベル法律事務所

平成 23 年 東京赤坂中央法律事務所
中島総合法律事務所

平成 27 年 大門総合法律事務所

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 27 年度 「法文書作成」

《兼任教員》講師 稲田 和也（民法）

1 略歴

昭和 63 年 京都大学法学部卒業
昭和 63 年 三井物産株式会社入社
平成 4 年 筑波大学大学院経営政策科学研究科修士課程修了・修士（法学）取得
平成 5 年 積水化学工業株式会社入社
平成 24 年 山梨大学生命環境学部教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 27 年度 「民法 1」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「定款自治と強行法性」

（共著、平成 27 年、椿寿夫編著『民法における強行法・任意法』299 頁，日本評論社）

（2）論文・判例評釈等

「債権担保としての買戻しの可能性－民法（債権関係）改正議論を契機として」

（平成 26 年 9 月，『NBL』1033 号 53 頁）

「定款自治と強行法規性」

（平成 26 年，『法律時報』1073 号 90 頁）

「敷金をめぐる民法改正議論と不動産賃貸実務」

（平成 25 年，『不動産学会誌』105 号 69 頁）

「抵当権実行時期選択の自由の性質と限界」

（平成 23 年，『法律時報』1041 号 345 頁）

「弁済に関する企業実務上のいくつかの問題点－非金融機関の場合」

（平成 23 年，『ジュリスト』1434 号 106 頁）

（3）学会・研究会報告

平成 27 年 6 月，取引法研究会において，「診療債務の内容形成と診療ガイドライン」のテーマで報告

平成 25 年 3 月，大阪企業法務研究会において，「土地取引における心理的瑕疵－嫌悪すべき歴史的背景に注目して」のテーマで報告。

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

大阪地方裁判所裁判所委員会（有識者委員）（平成 23 年 4 月～平成 25 年 2 月）

《兼任教員》講師 岩出 誠（労働法・実務家教員）

1 略歴

昭和 48 年 千葉大学人文学部法経学科卒業
昭和 48 年 司法試験合格
昭和 50 年 東京大学大学院法学政治学研究科修了
昭和 50 年 司法修習生
昭和 52 年 弁護士登録（山本栄則法律事務所）
昭和 56 年 飯田・岩出特許法律事務所
昭和 60 年 千葉大学法経学部講師（～昭和 64 年）
昭和 61 年 岩出綜合法律事務所所長
平成 3 年 千葉工業大学工業経営学科講師（～平成 6 年）
平成 10 年 柏市男女共同参画推進審議会会長就任（～平成 14 年 3 月）
平成 10 年 東京簡易裁判所調停委員就任
平成 13 年 ロア・ユナイテッド法律事務所代表パートナー
平成 13 年 厚生労働省労働政策審議会労働条件分科会公益代表委員就任（～平成 19 年 4 月）
平成 17 年 青山学院大学大学院ビジネス法務専攻講師
平成 18 年 首都大学大学院東京社会科学部研究科法曹養成専攻講師
平成 18 年 青山学院大学客員教授
平成 19 年 千葉大学大学院専門法務研究科講師
平成 20 年 千葉大学大学院専門法務研究科客員教授
平成 22 年 東京地方裁判所調停委員就任
国土交通省「建設弘済会等に係る事業譲渡手法等の課題検討チーム」アドバイザリースタッフ就任／厚生労働省「外ぼう障害に係る障害等級の見直しに関する専門検討会」専門委員就任
平成 24 年 千葉県ハラスメント相談・苦情処理 委員会委員

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 23 年度 「社会法総合演習」
平成 24 年度 「社会法総合演習」
平成 25 年度 「社会法総合演習」
平成 26 年度 「社会法総合演習」
平成 27 年度 「社会法総合演習」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「時間外労働と、残業代請求をめぐる諸問題」

（共著，平成 23 年，産労総合研究所）

「実務 不法行為法講義【第 2 版】第 22 章 不当解雇・セクハラ・パワハラ等と不

法行為責任」を担当執筆 (共著, 平成 24 年, 民事法研究会)
 「実務解説 労働争訟手続法」 (ロア・ユナイテッド法律事務所/編, 平成 24 年, 青林書院)
 「人事労務担当者の疑問に答える 平成 24 年改正 改正労働者派遣法」 (平成 24 年, 第一法規)
 「労政時報相談室 Q&A 精選 100」 (平成 24 年, 労務行政研究所 編)
 「変貌する有期労働契約法制と企業の実務対応」 (岩出 誠 編著, 平成 25 年, 日本法令)
 「平成 24 年改正労働法の企業対応—派遣法, 労働契約法, 高年齢者雇用安定法改正の実務留意点」 (平成 25 年, 中央経済社)
 「新版・労働関係法改正にともなう就業規則変更の実務」 (岩出 誠 編著, 平成 25 年, 清文社)
 「Q & A 人事労務リスクマネジメント実務全書」 (編集代表/岩出 誠, 平成 25 年, 民事法研究会)
 「Q & A 労働法実務シリーズ/7 雇用機会均等法・育児介護休業法〈第 2 版〉」 (ロア・ユナイテッド法律事務所著, 平成 25 年, 中央経済社)
 「民事調停の実務」 (羽成 守・野本俊輔 編, 平成 25 年, 青林書院)
 「Q & A 現代型労働紛争の法律と実務」 (光前幸一・岩出誠他共著, 平成 25 年, 日本加除出版)
 「事例で学ぶ 労働問題対応のための民法基礎講座」 (ロア・ユナイテッド法律事務所 編著, 平成 25 年, 日本法令)
 「新労働事件実務マニュアル 第 3 版」 (東京弁護士会労働法制特別委員会 編著, 平成 26 年, ぎょうせい)
 「メンタルヘルスの法律問題—企業対応の実務」 (ロア・ユナイテッド法律事務所 編, 平成 26 年, 青林書院)
 「日弁連研修叢書 現代法律実務の諸問題〈平成 25 年度研修版〉」 (日本弁護士連合会 編, 平成 26 年, 第一法規)
 「新版 新・労働法実務相談 (第 2 版)」 (労務行政研究所 編, 平成 26 年, 労務行政)
 「こう変わる! 新卒採用の実務」 (労務行政研究所 編, 平成 26 年, 労務行政)
 「平成 26 年改正労働法の企業対応—有期特例法, 改正パート労働法, 改正安衛法等の実務留意点」 (平成 26 年, 中央経済社)
 「労働事件 立証と証拠収集」 (平成 27 年, 創耕社)
 「労働事件における慰謝料」 (平成 27 年, 産労総合研究所出版部経営書院)
 「論点体型 判例労働法 1」 (平成 27 年, 第一法規)
 「労使双方の視点で考える 27 のケースから学ぶ労働事件解決の実務」 (平成 27 年, 東京弁護士会労働法制特別委員会 編, 日本法令)
 「労働法実務大系」 (平成 27 年, 民事法研究会)
 「弁護士専門研修講座 労働環境の多様化と法的対応『I 有期・パート労働』」 (平成 28 年 2 月, 東京弁護士会弁護士研修センター運営委員会 編, ぎょうせい)

(2) 論文

- 「偽装請負的態様で就労中の派遣労働者の過労自殺と企業責任」
(平成 23 年, 『ジュリスト』 1414 号 252 頁)
- 「改正労働契約法に関する実務上の留意点 Q&A」
(『労務事情』 平成 24 年 10 月 15 日付 1239 号 23 頁)
- 「割増賃金事件の審理に関する弁護士会と裁判所との協議会」
(『判例タイムズ』 平成 24 年 5 月 15 日付 1367 号 29 頁)
- 「労組法上の労働者性認定をめぐる裁判例の動向と実務的留意点」
(『市民と法』, 平成 23 年 8 月 1 日付 70 号 25 頁)
- 「高年法に基づく再雇用制度での違法な採用拒否の効果」
(平成 24 年, 『ジュリスト』 1436 号 123 頁)
- 「精神的不調のため欠勤する労働者への対応」
(平成 25 年, 『ジュリスト』 1451 号 118 頁)
- 「みなし割増賃金をめぐる判例法理の動向とその課題」
(『労働法学の展望－菅野和夫先生古希記念論集』, 荒木尚志 岩村正彦
山川隆一 編所収, 平成 25 年 3 月 31 日, 有斐閣)
- 「早出、遅刻、休憩、移動を巡る労働時間管理」
(平成 25 年, 『労務事情』 1254 号 28 頁)
- 「2014 年における人事・労務の展望」 (平成 25 年, 『会社法務 A2Z』 80 号 16 頁)
- 「正確な時間外労働の実績を把握していない場合でも、会社は割増賃金の支払い義務を負うか」
(平成 26 年, 『労政時報』 3868 号 144 頁)
- 『災害発生時における人事・労務管理のポイント』
(平成 26 年, 『会社法務 A2Z』 86 号 14 頁)
- 「無効な解雇による就労拒否と年休の出勤率要件－八千代交通（年休権）事件」
(平成 26 年, 『ジュリスト』 1470 号 95 頁)
- 「どうなる？ホワイトカー・エクゼンション～最新の動向を踏まえた実務上の諸問題と対応策」
(平成 26 年, 『ビジネスガイド』 794 号 28 頁)
- 「東京地裁労働部と東京三弁護士会の協議会 第 11 回」
(平成 26 年, 『判タ』 1403 号 27 頁)
- 「使用者側から見た労働審判制度の意義と課題」
(平成 27 年, 法律のひろば Vol. 68/No. 5、26 頁)
- 「入退場管理 IC カードによる労働時間算定の可否－オリエンタルモーター(割増賃金)事件」
(平成 27 年, 『ジュリスト』 1486 号 99 頁)
- 「女性活躍推進法」&「青少年雇用促進法」概要と実務のポイント（上）」
(平成 28 年 1 月, 『ビジネスガイド』 815 号 18 頁)
- 「女性活躍推進法」&「青少年雇用促進法」概要と実務のポイント（下）」
(平成 28 年 2 月, 『ビジネスガイド』 NO. 817(日本法令) 48 頁)
- 「改正労働者派遣法の企業への影響」
(平成 28 年 1 月, 「会社法務 A2Z」 NO. 105(第一法規) 8 頁)

「労災保険給付受給者への打切補償による解雇の可否－学校法人専修大学事件」

(平成 28 年 1 月, 『ジュリスト』 1489 号 122 頁)

「司法による労災保険制度破壊への懸念」

(平成 28 年 3 月発行「至誠」創立 60 周年記念号(法友会第 6 部至誠会)25 頁)

(3) 学会・研究会報告

東大労働法研究会にての判例研究報告：上記ジュリスト労働法研究に反映

4 学外での公的活動，社会貢献活動等

昭和 52 年 4 月から弁護士として活動。大型労働事件に携わるほか，60 件以上の労働審判を処理。

東京弁護士会労働法制特別委員会副委員長（平成 25 年 3 月まで）として後進の育成に尽力し，実務修習の司法修習生や法科大学院のエクスターンの指導にも当たる。

平成 13 年，厚生労働省労働政策審議会労働条件分科会会員に就任し，労働基準法の改正，労働契約法の立法に関与（平成 19 年 4 月まで），平成 19 年 4 月，人事院職員福祉局補償課精神疾患等認定基準研究会委員に就任し，精神障害の公務災害認定基準の改正に関与(同年 10 月まで)，平成 22 年 7 月，国土交通省「建設弘済会等に係る事業譲渡手法等の課題検討チーム」アドバイザーリースタッフ就任し，同年 2 月，厚生労働省「外ぼう障害に係る障害等級の見直しに関する専門検討会」専門委員に就任し，各基準改正等に関与。

《兼任教員》講師 上岡 亮（弁護士実務・実務家教員）

1 略歴

平成 3 年 慶應義塾大学法学部政治学科卒業

平成 3 年 住友海上火災保険株式会社勤務（～平成 12 年）

平成 18 年 東京都立大学大学院社会科学部研究科法曹養成専攻修了

平成 19 年 司法試験合格

平成 20 年 弁護士登録（東京リベルテ法律事務所）

2 本学法科大学院における教育活動（担当授業科目）

平成 24 年度 「法文書作成」

平成 25 年度 「法文書作成」

平成 26 年度 「法文書作成」

平成 27 年度 「法学入門演習」「民事法入門演習」

3 研究活動（過去 5 年間について）

(1) 著書

『医療ミスでは？と思ったら読む本』

（共著，平成 23 年，日本評論社）

- 4 学外での公的活動及び社会貢献活動
第二東京弁護士会・刑事弁護委員会
東日本大震災による原発事故被災者支援弁護団
著作権法学会

《兼任教員》講師 大橋 弘（民法・実務家教員）

1 略歴

昭和 48 年 裁判官任官、東京地裁八王子支部判事補
昭和 51 年 鹿児島家裁判事補
昭和 53 年 東京地裁判事補
昭和 56 年 札幌地裁判事補
昭和 57 年 同判事
昭和 60 年 東京地裁判事
昭和 63 年 釧路地裁帯広支部長
平成 2 年 東京地裁判事
平成 4 年 最高裁判所調査官
平成 10 年 東京地裁部総括判事
平成 13 年 東京高裁判事
平成 17 年 仙台高裁部総括判事
平成 21 年 首都大学東京法科大学院教授（～平成 26 年）
平成 26 年 首都大学東京法科大学院非常勤講師

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 23 年度 「民法総合 1， 2， 4」「法曹倫理」「民法演習」
平成 24 年度 「民法総合 1， 2， 4」「法曹倫理」「民法演習」「法文書作成」
平成 25 年度 「民法総合 1， 2， 4」「法曹倫理」「民法演習」「法文書作成」
平成 26 年度 「民法演習」「民事裁判と事実認定」
平成 27 年度 「民法演習」「民事裁判と事実認定」

3 学外での公的活動及び社会貢献活動

昭和 48 年 4 月、裁判官に任官。以来、東京地裁八王子支部、鹿児島家裁、東京地裁（前後 4 回）、札幌地裁、釧路地裁帯広支部、最高裁調査官室、東京高裁、仙台高裁において主に民事事件などを担当。東京高裁勤務当時は日弁連からの委嘱を受けて外国法事務弁護士懲戒委員会の委員に就任（2 年間）。

《兼任教員》講師 小倉 秀夫（知的財産法・実務家教員）

1 略歴

平成 4 年 早稲田大学法学部卒業
平成 6 年 東京平河法律事務所
平成 12 年 中央大学法学部兼任講師
平成 21 年 明治大学法学部兼任講師

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 27 年度 「知的財産法 1」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書、論文・判例評釈等

「不正競争防止法 平成 27 年改正の全容」（単著，平成 27 年，LexisNexis Japan）
「野村豊弘先生古稀記念『知的財産・コンピュータと法』」
（共著，平成 28 年，商事法務）
「著作権法判例百選〔第五版〕」 （共著，平成 28 年，有斐閣）
「スポーツと知的財産権」（単著，平成 26 年，『パテント』4 月号）
「著作権法コンメンタール」（編著，平成 25 年）
「著作者人格権」（「知的財産法の現代的発展（現代知的財産法講座）」所収）
（単著，平成 24 年）
「ネットベンチャーの著作権実務」
（単著，平成 24 年，『法学セミナー』9 月号）
「初音ミクを縛るのは誰？——ヴォーカロイドを巡る法律問題」
（単著，平成 23 年，『S-F マガジン』8 月号）
「エンターテインメント法」（共著，平成 23 年）

（2）学会・研究会報告

平成 27 年 11 月，情報ネットワーク法学会において，「情報財に対する強制執行～営業秘密、著作物性のないデータベースを中心に」のテーマで報告
平成 28 年 11 月，情報ネットワーク法学会において，「第 5 分科会 インターネット上の民事紛争処理」のテーマでシンポ

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

葛飾区都市計画審議会委員及び東京都人権擁護委員会委員

《兼任教員》講師 川端 一光（統計学）

1 略歴

平成 15 年 駒沢大学文学部心理学科卒業
平成 20 年 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学，博士（文学）取得
平成 22 年 立行政法人国際交流基金 日本語試験センター研究員
平成 25 年 明治学院大学心理学部専任講師
平成 28 年 明治学院大学心理学部准教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 27 年度 「統計学」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「回帰分析入門-R で学ぶ最新データ解析-(全 1 節担当)」
(分担執筆，平成 24 年，東京図書)
「共分散構造分析 [数理編] - 構造方程式モデリング- (全 1 節担当)」
(分担執筆，平成 24 年，朝倉書店)
「項目反応理論 [中級編] (全 1 節)」 (分担執筆，平成 25 年，朝倉書店)
「共分散構造分析 [R 編] - 構造方程式モデリング- (全 1 節担当)」
(分担執筆，平成 26 年，東京図書)
「R による項目反応理論 (全 2 節担当)」 (共著，平成 26 年，オーム社)
「心理学のための統計学入門 (全節担当)」 (共著，平成 26 年，誠信書房)

（2）論文・判例評釈等

「The genetic and environmental relationships between head circumference growth in the first year of life and sociocognitive development in the second year: A longitudinal twin study.」

(共著、平成 23 年，Developmental Science, 15(1).)

評価者の弁別力推定の為の項目反応モデル-3 相順位データへの適用-

(単著、平成 26 年，明治学院大学心理学紀要，25.)

（3）学会・研究会報告

平成 24 年 2 月，自己評価データに基づく can-do 尺度構成法の改善-未経験バイアスの定量的評価と補正-(International Workshop on Information System for Social Innovation 2011 セッション『情報社会の教育テスト』での話題提供)

平成 24 年 3 月，実務に生かす項目反応理論（日本行動計量学会第 96 回行動計量シンポジウム「項目反応理論の基礎と応用」話題提供）

平成 24 年 8 月，川端一光・尾崎幸謙・孫媛、離散階層 DINA モデルの提案（日本テスト学会第 10 回大会セッション『統計モデル・テスト理論』での話題提供）

平成 25 年 2 月、川端一光・尾崎幸謙・孫媛、離散階層型 DINA モデルの提案
(International Workshop on Information System for Social Innovation 2013 セッ
ション『学習ライフログの活用と学習診断』での話題提供)

平成 26 年 9 月、データサイエンティストが直面する課題（ラウンドテーブル指定討
論）（行動計量学会第 43 回大会）

平成 26 年 12 月、項目プールの拡充法とその留意点（第 8 回『日本テスト学会賞』
記念講演会およびワークショップ「項目反応理論を用いたテスト運用の実際」での話
題提供）

平成 27 年 3 月、値引き商品に対する購買行動に基づく顧客分類（平成 27 年データ
解析コンペティション JSCS スタディグループ）

平成 27 年 9 月、幼児の食と睡眠に関する研究（3）母親の調理行動・食行動のパタ
ーンが子どもの生活に及ぼす影響について（日本心理学会第 79 回大会）

平成 27 年 9 月、幼児の食と睡眠に関する研究（4）休日のブランチの習慣は様々な
症状を悪化させる（日本心理学会第 79 回大会）

平成 27 年 10 月、よくわかる偏回帰係数 一統合的理解の為の実践例一（日本教育心
理学会第 58 回総会 企画セッション「文系学生に対する心理統計教育 一回帰分析の
授業について考える」）

平成 27 年 11 月、食事画像評価のための尺度開発（一般社団法人日本官能評価学会
2016 年度大会）

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

『教育心理学』編集委員会常任編集委員

『法科大学院全国統一適性試験』適性試験管理委員会委員

《兼任教員》講師 川村 栄一（租税法・実務家教員）

1 略歴

昭和 48 年 横浜国立大学経済学部卒業・経済学士

昭和 48 年 東京都庁採用

平成 6 年 主税局税制部税制課長

平成 12 年 主税局税制調査担当部長

平成 14 年 総務局特命担当部長（銀行税訴訟担当）

平成 16 年 主税局税制部長

平成 17 年 首都大学東京大学院（法曹養成専攻）非常勤講師（租税法 1，2）

平成 18 年 人事委員会事務局任用公平部長

平成 20 年 東京都庁退職(理事)

平成 21 年 首都大学東京法科大学院教授

平成 27 年 首都大学東京法科大学院非常勤講師

2 本学法科大学院における教育活動（過去5年間の担当授業科目）

平成23年度 「租税法1, 2」「租税訴訟実務の基礎」
平成24年度 「租税法1, 2」「租税法演習」「租税訴訟実務の基礎」
平成25年度 「租税法1, 2」「租税法演習」「租税訴訟実務の基礎」
平成26年度 「租税法1, 2」「租税法演習」「租税訴訟実務の基礎」
平成27年度 「租税法1, 2」「租税訴訟実務の基礎」

3 研究活動（過去5年間について）

（1）著書

「税務力アップシリーズ 地方税（平成24年度版）」 （単著，平成24年，清文社）
「演習ノート 租税法（第3版）」 （共著，平成25年，法学書院）
「債権管理・回収の手引き ―自治体職員のための事例解説」
（共著，平成24年，第一法規。以後平成27年度まで毎年度改訂版の発刊）
「行政大事典」
（共著，ぎょうせい，平成21年執筆の国税（全部）と地方税の一部の原稿について、
平成23年度改訂から平成25年度改訂まで毎年度改訂版の発刊）
「地方税 取扱いの手引（平成25年改訂版）」 （共著，平成25年，清文社）
「地方税 取扱いの手引（平成26年改訂版）」 （共著，平成26年，清文社）
「地方税 取扱いの手引（平成27年改訂版）」 （共著，平成27年，清文社）

（2）論文

「神奈川県臨時特例企業税に関する最高裁平成25年3月21日判決の疑問点と地方税法に規定する法定外税の地方税条例による制定範囲の検討について」
（単著，平成26年『法学会雑誌』）

（3）学会・研究会報告

平成24年1月13日，日本税法学会関東地区研究会，「債権の貸倒れの資産損失としての必要経費算入 ―診療報酬に係る返還債務の資産損失該当性」のテーマで報告
平成25年10月11日，日本税法学会関東地区研究会，「神奈川県臨時企業特例税に関する最高裁平成25年3月21日判決の疑問点と地方税法に規定する法定外税の地方税条例による制定範囲の検討について」のテーマで報告

4 学外での公的活動、社会貢献活動等

日本税法学会会員。租税訴訟学会会員。
民間税制調査会委員。

昭和48年東京都庁に入庁し、昭和52年から主税局勤務。主税局税制部税制課長、総務局特命担当部長、主税局税制部長等を歴任。都税条例等の立案等に従事。東京都銀行税訴訟控訴審・上告審に東京都の指定代理人として関与した経歴も有する。全国市町村アカデミー研修講師、川崎市税務職員研修講師、神奈川県都市税務協議会講師、青山学院大学大学院非常勤講師、神奈川大学大学院非常勤講師、沖縄県法定外目的税導入に関する特別委員会委員等を歴任。

《兼任教員》講師 工藤 莞司（知的財産法・実務家教員）

1 略歴

昭和 39 年 特許庁審査官・審判官等（～平成 12 年）
昭和 44 年 中央大学法学部法律学科卒業
平成 11 年 特許庁審判長
平成 12 年 弁理士登録（創英国際特許法律事務所～現在）
平成 16 年 首都大学東京法科大学院教授（～平成 20 年）
平成 20 年 首都大学東京法科大学院非常勤講師

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 23 年度 「知的財産法演習」
平成 24 年度 「知的財産法演習」
平成 25 年度 「知的財産法演習」
平成 26 年度 「知的財産法演習」
平成 27 年度 「知的財産法演習」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「商標法の解説と裁判例」改訂版 （単著，平成 25 年，マスターリンク）
「不正競争防止法解説と裁判例 改訂版」 （単著，平成 24 年，発明推進協会）
「実例で見る商標審査基準の解説 第八版」 （単著，平成 25 年，発明推進協会）
「知っておきたい特許法 21 訂版」 （共著，平成 27 年，朝陽会）

（2）論文

「ブルーノート事件判例評釈」
（判例時報 2145 巻 1 号 168 頁，『判例評論』640 号 22 頁）
「商標の類似に関する判例と最近の知財高裁裁判例」
（『LES JAPAN NEWS』 Vol. 53 No. 2, June. 2012）
「無効審判において、商標法 46 条 1 項 5 号に規定する後発的不登録事由同法 4 条 1 項 7 号に該当するとした審決が取り消された事例」
（『知財管理』 Vol. 63 No12 2013）

4 学外での公的活動、社会貢献活動等

特許庁審査官，審判長の経歴を有する。
現在弁理士，中央大学大学院講師として活動。
特許庁，日本弁理士会，発明促進協会研修講師を担当
やまがた特命観光・つや姫大使

《兼任教員》講師 駒田 泰土（知的財産法）

1 略歴

平成 4 年 早稲田大学社会科学部卒業

平成 10 年 筑波大学大学院社会科学研究科博士課程修了・博士（法学）取得

平成 23 年 上智大学法学部教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 27 年度 「知的財産法 2」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「知的財産法 I 特許法」 (共著, 平成 26 年, 有斐閣)

「知的財産法演習ノート 知的財産法を楽しむ 23 問 第 3 版」
(共著, 平成 23 年, 弘文堂)

「ケースブック知的財産法 第 3 版」(弘文堂ケースブックシリーズ)
(共著, 平成 24 年, 弘文堂)

『論点解析知的財産法 第 3 版』 (共著, 平成 23 年, 商事法務)

（2）論文・判例評釈等

「神をも風刺する自由一法的に許容すべきパロディの本質について」
(共著, 平成 27 年, 『現代知的財産法 実務と課題 飯村敏明先生退官記念
論文集』1179～1202 頁, 発明推進協会)

「映画をめぐる著作権法上の規律 ドイツ法及びフランス法」(シンポジウム 映画
の著作物の著作者・著作権者)

(単著, 平成 27 年, 『著作権研究』41 号 43～75 頁, 有斐閣学術センター)

「外国確定給付判決の執行判決手続係属中における消極的確認の訴えの利益」(判
批: 東京地裁平成 25. 2. 19 判決)

(単著, 平成 27 年, 『新・判例解説 watch 速報判例解説』16 巻 261～264 頁,
日本評論社)

「インターネットショッピングモールの出店者による商標権侵害と同モール運営者
の責任」(判批: 知財高裁平成 24. 2. 14 判決)

(単著, 平成 26 年, 『新・判例解説 watch 速報判例解説』14 号 257～260 頁,
日本評論社)

「座長コメント (国際化時代の不正競争)」

(単著, 平成 26 年, 『日本国際経済法学会年報』23 号 100～105 頁, 法律文化社)

「特許法 102 条 2 項の適用について、特許権者において、当該特許発明を実施して
いることを要件とするのではなく、特許権者に、侵害者による特許権侵害がな
かったならば利益が得られたであろうという事情が存在する場合には、同項の適
用が認められるとされた事例」(判批: 知財高裁平成 25. 2. 1 判決)

(単著、平成 26 年、『判例評論』660 号 156～161 頁、判例時報社)
「実演家の権利に係る若干の論点についての考察——フランス法上の議論を導きの糸として——」

(共著、平成 25 年、『実演家概論 権利の発展と未来への道』262～286 頁、平成勁草書房)

「特許権の取戻しと善意の第三者の保護」

(共著、平成 25 年、『知的財産法の挑戦』142～159 頁、弘文堂)

「欧州におけるクラウド・コンピューティングと著作権 プロバイダーの責任制限に係る法理の展開に焦点を当てて」

(共著、平成 25 年、『クラウド時代の著作権法——激動する世界の状況』(KDDI 総研叢書) 43～70 頁、勁草書房)

「表現の全体(まとめ)は部分についての翻案を否定しうるか 釣りゲータウン 2 事件知財高裁判決の検討」(判批：知財高裁平成 24.8.8 判決)

(単著、平成 25 年、『知的財産法政策学研究』43 号 109～144 頁、北海道大学情報法政策学研究センター)

「商品の輸入販売に必要な不可欠な手続を行った者による意匠権の侵害」(判批：大阪地裁平成 24.11.8 判決)

(単著、平成 25 年、『新・判例解説 watch 速報判例解説』13 号 211～214 頁、日本評論社)

「講演録 著作権に係る抵触法の領分と実質法の領分」

(単著、平成 25 年、『コピーライト』53 巻 626 号 2～17 頁、著作権情報センター)

「共同著作、二次的著作」

(共著、平成 24 年、日本評論社『現代知的財産法講座 I 知的財産法の理論的探求』211～230 頁)

「Active か Neutral か——不安定なセーフハーバーとその先にあるもの知的財産権の侵害に係るプロバイダの責任をめぐる近時の動向」

(単著、平成 24 年、『年報知的財産法 2012 特集クラウド・コンピューティングを巡る著作権法上の諸課題』42～55 頁、日本評論社)

「25 条 外国人の権利の享有」「26 条 条約の効力」

(共著、平成 23 年、『新・注解特許法 上巻』205～217 頁、青林書院)

「著作権法およびその他の知的財産法におけるプロダクト・デザインの保護」「フランスにおける著作権の制限について」

(共著、平成 23 年、『早稲田大学ロースクール著作権法特殊講義 著作権侵害をめぐる喫緊の検討課題 1』111～150 頁・151～188 頁、成文堂)

「テレビ CM 原版の映画製作者」(判批：東京地裁平成 23.12.14 判決)

(単著、平成 25 年、『新・判例解説 watch 速報判例解説』11 号 229～232 頁、日本評論社)

「属地主義」(判批：最高裁平成 9.7.1 判決)

(単著、平成 24 年、『国際私法判例百選第 2 版(別冊ジュリスト 210 号)』102～103 頁、有斐閣)

「私的録画補償金制度における製造業者の協力義務と特定機器該当性」(判批：知財高裁平成 23. 12. 22 判決)

(単著，平成 24 年，『平成 23 年度重要判例解説（ジュリスト臨時増刊 1440 号）』285～286 頁，有斐閣)

「外国人の権利の享有と未承認国」(判批：最高裁昭和 52. 2. 14 判決)

(単著，平成 24 年，『特許判例百選第 4 版（別冊ジュリスト 209 号）』198～199 頁，有斐閣)

「座談会 知的財産法の今日的論点をめぐって」

(共著，平成 23 年，『年報知的財産法 2011 特集電子出版をめぐる著作権法上の課題』1～22 頁，日本評論社)

「公衆の用に供されている電気通信回線に接続することにより、当該装置に入力される情報を受信者からの求めに応じ自動的に送信する機能を有する装置は、単一の機器宛てに送信する機能しか有しない場合であっても、当該装置を用いて行われる送信が自動公衆送信であるといえるときは、自動公衆送信装置に当たるとし、原判決を破棄して差し戻した事例」(判批：最高裁平成 23. 1. 18 判決)

(単著，平成 23 年，『判例評論』634 号 175～180 頁，判例時報社)

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

日本工業所有権法学会理事（平成 26 年～平成 27 年）、『知的財産法政策学研究』（北海道大学情報法政策学研究センター）編集委員（平成 27 年～）、文化審議会著作権分科会法制問題小委員会パロディ・ワーキングチーム員（平成 24 年～25 年）

《兼任教員》講師 酒井 享平（経済法・実務家教員）

1 略歴

昭和 48 年 横浜国立大学経済学部経済学科卒業

昭和 48 年 公正取引委員会事務局入局（審査局特別審査部長等，～平成 16 年）

平成 16 年 東京都立大学法科大学院教授

平成 17 年 首都大学東京法科大学院教授（～平成 25 年）

平成 25 年 首都大学東京法科大学院非常勤講師

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 23 年度 「経済と法」「独占禁止法 1，2」「独占禁止法演習」

平成 24 年度 「経済と法」「独占禁止法 1，2」「独占禁止法演習」

平成 25 年度 「経済と法」「独占禁止法 1，2」

平成 26 年度 「経済と法」「独占禁止法 1」

平成 27 年度 「経済と法」

3 研究活動（過去 5 年間について）

(1) 論文

「TOPICS 優越的地位濫用に関する独禁法ガイドライン①～④」

(単著, 『空衛』平成 23 年 1～3 月号, 4・5 月合併号)

「発注者・受注者間における建設業法令遵守ガイドライン①」

(単著, 『空衛』平成 24 年 3 月号)

「東京都内における司法過疎問題の実態について—小笠原を中心として—」

(共著, 平成 25 年, 『小笠原研究年報』36 号)

「経済法体系の再構築—循環可能な経済社会を目指して—序説」

(単著, 平成 25 年, 『首都大学東京法学会雑誌』第 54 巻 2 号)

4 学外での公的活動、社会貢献活動等

日本経済法学会, 日本国際経済法学会, 日本経済政策学会 (平成 27 年退会), 環境経済・政策学会に所属。国家公務員としての勤務歴は 30 年余にわたり, その間, 公正取引委員会事務 (総) 局において審査審判部局を中心に勤務し, 外務省 (在ベルリン総領事館), 旧通商産業省 (GATT 班) 及び旧経済企画庁 (経済研究所・主任研究官) の勤務経験もある。J I C A 専門家 (中国独禁法立法支援), 東京都入札監視委員会委員, 環境省環境配慮契約法基本方針検討会電力 WG 委員・電力専門委員会委員等を歴任。詩を語る会代表。NPO 武蔵野のはやしとやしきを守る会事務局長。

《兼任教員》講師 鈴木 大介 (会計学)

1 略歴

平成 14 年 東京都立大学経済学部卒業

平成 16 年 東京都立大学大学院社会科学部研究科経済政策専攻修士課程修了

平成 20 年 東京都立大学大学院社会科学部研究科経済政策専攻博士課程修了

平成 20 年 麗澤大学経済学部助教

平成 23 年 麗澤大学経済学部准教授

2 本法科大学院における教育活動 (過去 5 年間の担当授業科目)

平成 26 年度 「会計学」

平成 27 年度 「会計学」

3 研究活動 (過去 5 年間について)

(1) 論文

「粉飾決算の動機と規模に関する一考察—株式会社シニアコミュニケーションの事例—」
(共著, 平成 24 年, 『経営会計研究』第 16 号)

「従業員等の意思決定と従業員ストック・オプションの費用計上」

(共著, 平成 24 年, 『会計プロGRESS』No.13)

「Window Dressing Settlement and the Economic Climate」

(共著, 平成 24 年, 『Business and Accounting Research』 Vol1)
“Model Analysis of Fraudulent Accounting and Earnings Management, ”

(共著, 平成 26 年, 『Proceedings of International Conference on
Contemporary Issues in Accounting and Finance』)

「粉飾決算の動機と規模—株式会社アクセスの事例より」

(共著, 平成 28 年 2 月, 『企業倫理と社会の持続可能性』, 麗澤大学出版会)

(2) 学会・研究会報告

平成 24 年 6 月 9 日, 日本経営会計学会第 13 回大会麗澤大学において, 「粉飾決算の動機と規模に関する一考察: 株式会社シニアコミュニケーションの事例」というテーマで報告。

平成 24 年 8 月 25 日, International Conference on Business Management in Australia at Bond universityにおいて, Fraudulent accounting and economic conditionsをテーマに報告。

平成 24 年 8 月 31 日, 日本会計研究学会第 71 回大会一橋大学において, 自由論題「粉飾決算と経済状況」のテーマで報告。

平成 25 年 9 月 5 日, 日本会計研究学会第 72 回大会中部大学において, 自由論題「粉飾決算と利益調整」のテーマで報告。

平成 27 年 9 月 7 日, 日本会計研究学会第 74 回大会神戸大学において, 自由論題「粉飾決算と利益調整のモデル分析」のテーマで報告。

平成 27 年 9 月 13 日, The First Cairo University International Conference on Accountingにおいて, Model Analysis of Fraudulent Accounting and Earnings Management のテーマで報告。

平成 27 年 10 月 9 日, International Conference on Contemporary Issues in Accounting and Financeにおいて, Model Analysis of Fraudulent Accounting and Earnings Management のテーマで報告。

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

日本会計研究学会所属

日本経営会計学会所属

法と経済学会所属

《兼任教員》講師 永井 敏雄（刑法・実務家教員）

1 略歴

昭和 47 年 東京大学法学部卒業

昭和 49 年 東京地裁判事補

昭和 61 年 最高裁調査官

平成 9 年 東京地裁部総括判事

平成 13 年 最高裁上席調査官
平成 18 年 甲府地家裁所長
平成 19 年 東京高裁部総括判事
平成 20 年 最高裁首席調査官
平成 24 年 広島高裁長官
平成 25 年 大阪高裁長官
平成 26 年 弁護士登録（卓照綜合法律事務所）

2 本法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 26 年度 「刑法演習」
平成 27 年度 「刑法演習」「刑事訴訟法演習」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「注釈刑事訴訟法 第 3 版 第 7 巻」（共著，平成 24 年，立花書房）
「大コンメンタール刑事訴訟法 第 2 版 第 1 巻」（共著，平成 25 年，青林書院）

（2）論文

「犯人の同一性」
（平成 25 年，『刑事事実認定重要判決 50 選 第 2 版 下巻』所収，立花書房）

（3）講演

「刑事裁判官に期待するもの」
（平成 27 年，司法研修所第一部の刑事実務研究会，司法研修所論集 125 号 1 頁以下所収）

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

警視庁留置施設視察委員会委員（刑事収容施設及び被収容者等の処遇に関する法律 20 条以下に基づくもの）
第一東京弁護士会文化研究委員会委員

《兼任教員》講師 中島 経太（刑事訴訟法・裁判実務・実務家教員）

1 略歴

昭和 63 年 4 月 横浜国立大学経済学部入学
平成 4 年 3 月 横浜国立大学経済学部経済法学科卒業
平成 4 年 10 月 司法試験第二次試験合格
平成 5 年 4 月 司法研修所修習生（～平成 7 年 3 月）
平成 7 年 4 月 千葉地方裁判所判事補（～平成 9 年 3 月）

平成 9 年 4 月 札幌地方裁判所室蘭支部判事補（～平成 12 年 3 月）
平成 12 年 4 月 東京地方裁判所判事補（～平成 15 年 3 月）
平成 15 年 4 月 広島地方裁判所福山支部判事補（～平成 17 年 4 月）
平成 17 年 4 月 広島地方裁判所福山支部判事（～平成 18 年 3 月）
平成 18 年 4 月 東京高等裁判所判事（～平成 19 年 7 月）
平成 19 年 8 月 東京地方裁判所判事（～平成 22 年 3 月）
平成 22 年 4 月 札幌地方裁判所判事（～平成 25 年 3 月）
平成 25 年 4 月 東京地方裁判所判事（現在に至る）

2 本法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 25 年度 「模擬裁判」「刑事訴訟実務の基礎」
平成 26 年度 「模擬裁判」「刑事訴訟実務の基礎」
平成 27 年度 「模擬裁判」「刑事訴訟実務の基礎」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「刑事実体法演習」 （共著，平成 27 年，立花書房）

（2）論文・判例評釈等

「被疑者段階の国選弁護人による勾留に対する準抗告が適法と認められる範囲について」

（共同執筆，植村立・判事退官記念論文集「現代刑事法の諸問題」第 2 巻第 2 編・315 頁，立花書房）

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

職歴欄記載のとおり裁判官を勤め，主として刑事公判事件を担当。

特殊部経験は，東京地裁刑事 8 部（租税部，平成 12 年 4 月～同 15 年 3 月在籍），同刑事 20 部（医療観察事件集中部，平成 19 年 8 月～同 22 年 3 月在籍）。

裁判官として関与した裁判事件は数多いが，主任裁判官として関与した著名事件に次のものが含まれる。

- ・いわゆるヤクルト財テク事件
（東京地裁平成 14 年 9 月 12 日判決 D1-Law・ID 28135219）
- ・芸能プロダクション社長による巨額脱税事件
（東京地裁平成 15 年 3 月 24 日判例時報 1830 号 152 頁）
- ・迎賓館・横田基地ゲリラ事件（差戻審）
（東京地裁平成 22 年 6 月 2 日 D1-Law・ID 28175096）

平成 20 年 2 月，同 21 年 2 月，同 22 年 2 月 司法研修所・新任簡裁判事研修「刑事証拠法」講師。

《兼任教員》講師 夏苺 一（弁護士実務・実務家教員）

1 略歴

平成 17 年 東京大学法学部卒業

平成 19 年 首都大学東京大学院社会科学研究所専門職学位課程修了・専門職学位
（法務博士）取得

平成 19 年 司法試験合格

平成 20 年 弁護士登録（松田綜合法律事務所）

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 27 年度 「法文書作成」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「スムーズな清算・再生のための倒産手続選択ハンドブック 改訂版」

（平成 24 年，ぎょうせい）

「改訂版 交通事故実務マニュアル 民事交通事件処理」（平成 24 年，ぎょうせい）

「事例式契約書作成時の税務チェック」（平成 24 年、新日本法規出版）

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

多摩市情報公開・個人情報保護審査会 委員

《兼任教員》講師 難波 知子（弁護士実務・実務家教員）

1 略歴

平成 15 年 立教大学法学部卒業

平成 19 年 首都大学東京大学院社会科学研究所専門職学位課程修了・専門職学位
（法務博士）取得

平成 19 年 司法試験合格

平成 20 年 弁護士登録（ロア・ユナイテッド法律事務所）

2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 27 年度 「法文書作成」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「メンタルヘルスの法律問題—企業対応の実務」

（共著，平成 26 年，株式会社青林書院）

「事例で学ぶ 労働問題対応のための民法基礎講座」

(共著, 平成 25 年, 株式会社日本法令)
「Q & A 労働法実務シリーズ／7 雇用機会均等法・育児介護休業法〈第 2 版〉」
(共著, 平成 25 年, 株式会社中央経済社)
「Q & A 人事労務リスクマネジメント実務全書」
(共著, 平成 25 年, 株式会社中民事法研究会)
「新版・労働関係法改正にともなう就業規則変更の実務」
(共著, 平成 25 年, 株式会社清文社)
「変貌する有期労働契約法制と企業の実務対応」
(共著, 平成 25 年, 株式会社日本法令)
「労政時報相談室 Q&A 精選 100」 (共著, 平成 24 年, 株式会社労務行政)
「実務解説 労働争訟手続法」 (共著, 平成 24 年, 株式会社青林書院)
「未払い残業代をめぐる法律と実務」 (共著, 平成 23 年, 日本加除出版株式会社)
「判例にみる労務トラブル解決のための方法・文例〔第 2 版〕」
(共著, 平成 23 年, 株式会社中央経済社)
「労災民事訴訟の実務」 (共著, 平成 23 年, 株式会社中央経済社)

(2) 論文・判例評釈等

「事案に即した紛争解決機関はどれだ!? 各種紛争解決機関・解決方法徹底比較」
(単著, 平成 26 年 『ビジネスガイド』第 778 146 頁, 日本法令)
「労働問題への対応に必要となる「民法」の基礎知識(契約各論 後半)」
(単著, 平成 24 年, 『ビジネスガイド』第 754 74 頁, 日本法令)
「労働問題への対応に必要となる「民法」の基礎知識(契約各論 前半)」
(単著, 平成 24 年, 『ビジネスガイド』第 753 72 頁, 日本法令)
「期間満了による雇止めが違法・無効と判断された場合に会社が負う法的責任」
(単著, 平成 24 年, 『ビジネスガイド』第 747 104 頁, 日本法令)
「震災を理由とする派遣契約の中途解約」
(単著, 平成 23 年, 『ビジネスガイド』第 730 104 頁, 日本法令)
「労働組合の結成に関与した管理職を懲戒解雇できるか」
(単著, 平成 27 年, 『労政時報』第 3887 152 頁, 労務行政)
「労働局に設置されている紛争調整委員会の「あっせん」とはどのようなものか」
(単著, 平成 25 年, 『労政時報』第 3857 120 頁, 労務行政)
「勤務時間内のインターネットの私的利用に対し、懲戒処分はどの程度まで可能か」
(単著, 平成 25 年, 『労政時報』第 3837 140 頁, 労務行政)
「内定取り消しが有効な場合でも、損害賠償責任が生じることはあるか」
(単著, 平成 24 年, 『労務行政』第 3818 172 頁, 労務行政)
「社員・役員にどこまで・いくら損害賠償等を請求できるか」
(単著, 平成 26 年, 『企業実務』No. 737 80 頁, エヌ・ジェイ出版販売)
「Q3. 犯罪歴や病歴を隠していた社員への対応は」
(単著, 平成 23 年, 『労務事情』No. 1205 12 頁, エヌ・ジェイ出版販売)
「管理監督者の「責任・権限・法律」ハンドブック」

(単著、平成 23 年、『企業実務』別冊付録 2011 年 4 月 690 号 9～11 頁、
エヌ・ジェイ出版販売)

- 4 学外での公的活動及び社会貢献活動
東京都港区法律相談委員、学校相談委員
東京弁護士会広報委員会委員

《兼任教員》講師 橋口 泰典（企業法務・実務家教員）

1 略歴

昭和 56 年 東京大学法学部卒業
昭和 58 年 司法研修所入所
昭和 60 年 小松・狛法律事務所入所（第一東京弁護士会）
平成 3 年 アメリカ合衆国ワシントン大学法学修士課程（LL.M.）卒業
平成 14 年 あさひ・狛法律事務所（小松・狛法律事務所とあさひ法律事務所合併）
平成 19 年 東京青山・青木・狛法律事務所ベーカーマッケンジー外国法事務弁護士事
務所（外国法共同事業）入所
平成 24 年 久田・橋口法律事務所設立

- 2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）
平成 27 年度 「企業法務」

《兼任教員》講師 福田 清明（民法）

1 略歴

昭和 55 年 中央大学法学部法律学科卒業
昭和 57 年 中央大学大学院法学研究科民事法専攻博士前期課程修了（法学修士号取得）
平成 3 年 ドイツ連邦共和国マールブルク大学で法学博士号取得
平成 5 年 明治学院大学法学部専任講師
平成 8 年 明治学院大学法学部助教授
平成 15 年 明治学院大学法学部教授
平成 16 年 明治学院大学法科大学院教授（現在に至る）

- 2 本学法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）
平成 27 年度 「民法 2」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書

「事例で学ぶ債権総論」(共著、法学書院、平成 23 年)

「市民法の新たな挑戦 ―加賀山茂先生還暦記念―」(共著、信山社、平成 25 年)

(2) 論文・判例評釈等

「判例研究 東京高判平 22・11・25 判時 2107・116 (民事)」

(単著、平成 24 年、『明治学院大学法科大学院ローレビュー』17 号 61 頁－72 頁)

「ドイツの『資本市場法上の争訟におけるムスタ手続に関する法律 (KapMuG)』の 2012 年改正——消費者の集団的権利保護制度の一翼を担う KapMuG——」

(単著、平成 25 年、『明治学院大学法科大学院ローレビュー』18 号 105 頁－125 頁)

「現行の弁済提供制度の解消と新たな債務不履行免責制度の導入 ―現行民法 492 条・493 条の債権法改正委員会の間論点整理に関連して―」

(単著、平成 26 年、『明治学院大学法科大学院ローレビュー』21 号 79 頁－107 頁)

「国際物品売買契約に関する国際連合条約 80 条を導入する場合の諸問題」

(単著、平成 27 年、『法学新報』第 122 巻第 1・2 号 763 頁～798 頁)

「追悼 ハンス・G・レーザー教授」

(単著、平成 27 年、『明治学院大学法科大学院ローレビュー』23 号 145 頁－152 頁)

「一般法人法における理事の代表権の制限に関する規律 ―判例の承継及び代理法への関連づけという視点から―」

(単著、平成 28 年、『明治学院大学法科大学院ローレビュー』24 号 79 頁－101 頁)

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

比較法学会 監事 (平成 13 年 6 月から平成 18 年 6 月まで)

私法学会 理事 (平成 15 年 10 月から平成 20 年 10 月まで)

《兼任教員》講師 藤田 新一郎 (弁護士実務・実務家教員)

1 略歴

平成 14 年 慶應義塾大学理工学部応用化学科卒業

平成 16 年 慶應義塾大学法学部法律学科卒業

平成 18 年 東京都立大学大学院社会科学部法曹養成専攻修了

平成 18 年 司法試験合格

平成 19 年 弁護士登録 (銀座共同法律事務所)

2 本学法科大学院における教育活動 (担当授業科目)

平成 24 年度 「法文書作成」

平成 25 年度 「法文書作成」

平成 26 年度 「法文書作成」

平成 27 年度 「法学入門演習」「法文書作成」「民事法入門演習」

3 学外での公的活動及び社会貢献活動

東京弁護士会 法教育センター運営委員会 委員（平成 20 年 4 月～）

《兼任教員》講師 本多 貞雅（弁護士実務・実務家教員）

1 略歴

平成 7 年 4 月 青山学院大学法学部入学
平成 11 年 3 月 青山学院大学法学部私法学科卒業
平成 11 年 4 月 東京海上火災保険株式会社（現：東京海上日動火災保険株式会社）
入社（～平成 12 年 3 月）
平成 12 年 4 月 有限会社トレーズ（不動産賃貸業）代表取締役（～平成 19 年 11 月）
平成 17 年 4 月 首都大学東京大学院社会科学研究科法制養成専攻（法科大学院）
入学
平成 19 年 3 月 首都大学東京大学院社会科学研究科法制養成専攻（法科大学院）
修了（法務博士（専門職））
平成 19 年 9 月 司法試験合格
平成 19 年 11 月 司法研修所修習生（～平成 20 年 12 月）
平成 20 年 12 月 日比谷見附法律事務所（～平成 22 年 12 月）
平成 23 年 1 月 本多総合法律事務所（現在に至る）

2 本法科大学院における教育活動（過去 5 年間の担当授業科目）

平成 25 年度 「模擬裁判」「刑事訴訟実務の基礎」
平成 26 年度 「模擬裁判」「刑事訴訟実務の基礎」
平成 27 年度 「模擬裁判」「刑事訴訟実務の基礎」

3 研究活動（過去 5 年間について）

（1）著書、論文

著書

「実践刑事弁護 国選弁護編新版第 2 版」

（共著，平成 23 年，40 頁－44 頁，現代人文社）

「入管訴訟マニュアル」

（共著，平成 25 年，14 頁－37 頁，現代人文社）

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

平成 21 年 4 月 東京弁護士会 刑事弁護委員会 委員
（平成 24 年 4 月～副委員長。現在に至る。）
平成 21 年 4 月 東京弁護士会 外国人の権利に関する委員会 委員
（平成 25 年 4 月～副委員長。現在に至る。）
平成 23 年～ 東京弁護士会・新規登録弁護士倫理研修・協議員（刑事弁護）
平成 24 年 4 月 東京弁護士会 子どもの人権と少年法に関する特別委員会 委員

(現在に至る。)

平成 24 年 6 月 日本弁護士連合会 法科大学院センター 幹事 (刑事実務研究会)

平成 25 年～ 東京弁護士会・新規登録弁護士刑事弁護研修・講師

《兼任教員》講師 前田 雅英 (刑法・刑事訴訟法)

1 略歴

昭和 47 年 東京大学法学部卒業

昭和 47 年 東京大学法学部助手

昭和 50 年 東京都立大学法学部助教授

昭和 63 年 東京都立大学教授

平成 17 年 首都大学東京法科大学院教授

平成 27 年 首都大学東京法科大学院非常勤講師

2 本学法科大学院における教育活動 (過去 5 年間の担当授業科目)

平成 23 年度 「刑法 3」「刑事訴訟法総合」「刑事法総合 1, 2」「医事刑法」

平成 24 年度 「刑事訴訟法総合」「刑事法総合 1, 2」「医事刑法」「刑法演習」

平成 25 年度 「刑事訴訟法総合」「刑事法総合 1, 2」「医事刑法」「刑法演習」

平成 26 年度 「刑法 3」「医事刑法」「経済刑法」「刑法演習」

平成 27 年度 「医事刑法」「経済刑法」

3 研究活動 (過去 5 年間について)

(1) 著書

「刑法各論講義 第 5 版」 (単著, 平成 23 年, 東京大学出版会)

「わかりやすい刑法」 (単著, 平成 24 年, 立花書房)

「ケースブック刑事訴訟法 第 3 版」 (共著, 平成 24 年, 弘文堂)

「条解刑法 第 3 版」 (共著, 平成 25 年, 弘文堂)

「刑事裁判実務の基礎 第 2 版」 (共編著, 平成 25 年, 弘文堂)

「ハンドブック刑事法」 (単著, 平成 26 年, 東京法令出版)

「刑事訴訟法判例ノート 第 2 版」 (共著, 平成 26 年, 弘文堂)

「刑事訴訟法講義 第 5 版」 (共著, 平成 26 年, 東京大学出版会)

「刑法総論講義 第 6 版」 (単著, 平成 27 年 2 月, 東京大学出版会)

「最新重要判例 250 刑法 第 10 版」 (単著, 平成 27 年 2 月, 弘文堂)

「ケースブック刑法 第 5 版」 (共著, 平成 27 年 3 月, 弘文堂)

(2) 論文

「合理的な疑いを容れない程度の証明」

(単著, 平成 23 年, 『警察学論集』 64 巻 3 号)

「共謀の認定と不作為の共同正犯」 (単著, 平成 23 年, 『警察学論集』 64 巻 4 号)

- 「令状執行の為の留め置き行為の適法性」
(単著, 平成 23 年, 『警察学論集』 64 巻 5 号)
- 「警察官の職務と公務・業務」 (単著, 平成 23 年, 『警察学論集警論』 64 巻 6 号)
- 「OA 機器と文書偽造」 (単著, 平成 23 年, 『警察学論集警論』 64 巻 7 号)
- 「警察官としての生き甲斐」 (単著, 平成 23 年, 『警察公論』 66 巻 8 号)
- 「危険運転致死傷罪の現状」 (単著, 平成 23 年, 『警察学論集』 64 巻 9 号)
- 「サイバー犯罪と刑事法」 (単著, 平成 23 年, 『罪と罰』 48 巻 4 号)
- 「薬物犯罪における故意の認定」
(単著, 平成 23 年, 東京法令『捜査研究』 725-2)
- 「所持品検査の限界」 (単著, 平成 23 年, 『警察学論集』 64 巻 10 号)
- 「刑事訴訟法 321 条 I 項の「供述不能」の解釈」
(単著, 平成 23 年, 『警察学論集』 64 巻 11 号)
- 「犯行再現写真の使用方法和証拠能力」
(単著, 平成 23 年, 『警察学論集』 64 巻 12 号)
- 「周旋と未成年であることの認識」 (単著, 平成 24 年, 『警察学論集』 65 巻 1 号)
- 「少年犯罪の現在と犯罪抑止・社会復帰」 (単著, 平成 24 年, 『青少年問題』)
- 「刑事訴訟における相当性判断」
(単著, 平成 24 年, 有斐閣『三井博士古希記念論文集』)
- 「裁判員裁判の合憲性」 (単著, 平成 24 年, 『警察学論集』 65 巻 2 号)
- 「インターネット犯罪の法益侵害性とその認識」
(単著, 平成 24 年, 『警察学論集』 65 巻 3 号)
- 「サイバー犯罪の現状と対策～不正アクセスから国民を守る～」
(単著, 平成 24 年, 『警察政策』)
- 「概念の相対性－『傷害』と『運転困難』」
(単著, 平成 24 年, 『警察学論集』 65 巻 4 号)
- 「誤想過剰防衛」 (単著, 平成 24 年, 『警察学論集』 65 巻 5 号)
- 「控訴審と上告審の判断の在り方」 (単著, 平成 24 年, 『警察学論集』 65 巻 6 号)
- 「間接正犯と共同正犯と教唆犯」 (単著, 平成 24 年, 『警察学論集』 65 巻 7 号)
- 「自動車・電車事故の原因の確定と構成要件該当性」
(単著, 平成 24 年, 『警察学論集』 65 巻 8 号)
- 「訴因変更の要否」 (単著, 平成 24 年, 『警察学論集』 65 巻 9 号)
- 「刑法 246 条の 2 とキセル乗車」 (単著, 平成 24 年, 『警察学論集』 65 巻 10 号)
- 「刑事精神鑑定の意義と課題」 (単著, 平成 24 年, 『法と精神医療』)
- 「同種前科による証明」 (単著, 平成 24 年, 『警察学論集』 65 巻 11 号)
- 「秘密の刑事法的保護」 (単著, 平成 24 年, 『警察学論集』 65 巻 12 号)
- 「現東京の安全と地域警察官の職務」
(単著, 平成 24 年, 『地域活動』 2013 年 1 月号)
- 「承継的共同正犯」 (単著, 平成 25 年, 『警察学論集』 66 巻 1 号)
- 「黙秘権の不告知と供述の証拠能力」 (単著, 平成 25 年, 『警察学論集』 66 巻 2 号)
- 「公務員の政治活動の禁止と構成要件の実質的解釈」

- (単著, 平成 25 年, 『警察学論集』 66 卷 3 号)
- 「自白法則と違法収集証拠排除」 (単著, 平成 26 年, 『捜査研究』 758 号)
- 「ストーカー処罰法の解釈」 (単著, 平成 26 年, 『捜査研究』 761 号)
- 「裁判員裁判の導入と量刑」 (単著, 平成 26 年, 『捜査研究』 763 号)
- 「精神的幫助」 (単著, 平成 26 年, 『捜査研究』 765 号)
- 「証拠隠滅のおそれと勾留請求却下」 (単著, 平成 27 年, 捜査研究 769 号)
- 「一人殺害しても死刑になる場合」 (単著, 平成 27 年, 捜査研究 771 号)
- 「実行の着手時期」 (単著, 平成 27 年, 捜査研究 772 号)
- 「傷害の意義 医学の進歩と概念の相対性」 (単著, 平成 27 年, 捜査研究 773 号)
- 「責任能力の総合判定」 (単著, 平成 27 年, 捜査研究 774 号)
- 「裁判員裁判と量刑」 (単著, 平成 27 年, 『裁判員裁判時代の刑事裁判』)
- 「捜査状況報告書の証拠能力」 (単著, 平成 27 年, 捜査研究 776 号)
- 「犯行予告による警察官の出動と業務妨害罪」 (単著, 平成 27 年, 捜査研究 777 号)
- 「同時傷害の特例の認定」 (単著, 平成 27 年, 捜査研究 778 号)
- 「準強姦罪の成立範囲」 (単著, 平成 27 年, 捜査研究 779 号)
- 「社会の変化に対応する警察活動」 (単著, 平成 28 年 3 月, 警察政策 18 卷 1 号)
- 「組織犯罪処罰法と組織詐欺罪」 (単著, 平成 28 年 1 月, 捜査研究 780 号)
- 「保護責任者遺棄致死罪の認定」 (単著, 平成 28 年 2 月, 捜査研究 781 号)
- 「刑事司法実務を規定するもの」 (単著, 平成 28 年 1 月, 日大法務研究 13 号)
- 「性犯罪者の実態と再犯防止」 (単著, 平成 28 年 1 月, 法律のひろば 69 卷 1 号)
- 「留め置き二分論の合理性」 (単著, 平成 28 年 3 月, 捜査研究 782 号)
- 「最近の少年犯罪の動向と少年非行対策」 (単著, 平成 28 年 1 月, 青少年問題 661 号)

4 学外での公的活動, 社会貢献活動等

現在, 内閣サイバーセキュリティ本部員, 警察政策学会顧問, 警察庁政策評価委員。
これまで最高裁判所一般規則制定委員会, 中教審, 中医協の委員を務める。さらに男女
共同参画会議, 法務省, 警察庁, 厚労省, 国交省, 東京都の審議会・懇談会委員を多数
務める。

《兼任教員》講師 森田 悦史 (民法)

1 略歴

- 平成 4 年 専修大学大学院法学研究科民事法学専攻博士課程退学
平成 6 年 秋田経済大学法学部専任講師
平成 12 年 国士舘大学法学部助教授
平成 17 年 国士舘大学法学部教授
平成 17 年 国士舘大学法学研究科教授

2 本学法科大学院における教育活動（過去5年間の担当授業科目）

平成26年度 「民法4」

平成27年度 「民法4」

3 研究活動（過去5年間について）

（1）著書

「コンダクト民法」 （共著，平成25年，嵯峨野書院）

「家族法（スタンダード民法シリーズⅤ）」 （共著，平成25年，嵯峨野書院）

「債権法総論（スタンダード民法シリーズⅢ）」 （共著，平成26年，嵯峨野書院）

「民法を知る2（債権・家族）」 （共著，平成27年，八千代出版）

（2）論文・判例評釈

判例紹介

「遺言執行者を解任すべき正当な事由があるとされた事例」

（単著，『民商法雑誌』150巻1号142頁～153頁，平成26年）

（3）翻訳

フィリップ・サニャック著「フランス革命における民事立法」(36)

（共著，フランス近代法研究会訳 大東法学20(2)（通号57）2011-03 p.111～111）

フィリップ・サニャック著「フランス革命における民事立法」(37)

（共著，フランス近代法研究会訳 大東法学21(1)（通号58）2011-11 p.175-182）

フィリップ・サニャック著「フランス革命における民事立法」(38)

（共著，フランス近代法研究会訳 大東法学21(2)（通号59）2012-03 p.159-163）

フィリップ・サニャック著「フランス革命における民事立法」(40)

（共著，フランス近代法研究会訳 フィリップ サニャック，大東法学23(1)

（通号61）2013-11 p.247-258）

フィリップ・サニャック著『フランス革命における民事立法』(41)

（共著，フランス近代法研究会訳 大東文化大学法学研究所報（35）2015-03

p.1-10（35）2015-03 p.1-10

（4）学会・研究会報告

平成27年10月24日，専修大学緑法学会24回大会（統一テーマ、ミシエル＝ベルンシ
ュタイン文庫資料の学際的研究）において、「ベル文に見られる人権理念痕跡とその特
徴」のテーマで報告

4 （国際）学会での公的活動、社会貢献活動

以下、International Society of Family Law（国際家族法学会世界会議、地域会議）に
出席

＊ Reclife, Brazil 6/08/2014 - 9/08/2014 The XVth ISFL World Conference was held
at the Regional Federal Tribunal in Recife, Brazil, August 6-9, 2014. The theme

was Family Law – Universalities and Singularities.

(2014、ブラジル・レセフェにて会議)

- * 14th World Conference 2011 Lyon, France 19/07/2011 – 23/07/2011 The 14th World Conference of the Society was held in Lyon, France from July 19th-23rd 2011. The theme was Generation solidarities.

(2011、フランス・リヨンにて会議)

- * 北米地域会議

Brooklyn Law School, New York 6/06/2013 – 8/06/2013 The 2013 North American Regional Conference of the ISFL was held on June 6-8 at Brooklyn Law School in New York.

(2013、ニューヨークのブルックリン・ロースクールにて北米地域会議)

- * 新・アジア家族法三国会議第5回会議

(2015. 12. 12 韓国・釜山東亜大学校富民キャンパス (法学専門大学院にて会議))

《兼任教員》講師 森山 茂徳 (比較政治)

1 略歴

昭和 51 年 東京大学大学院法学政治学研究科政治学専門課程博士課程退学

昭和 51 年 東京大学東洋文化研究所助手

昭和 57 年 新潟大学教養部講師

昭和 59 年 新潟大学教養部助教授

昭和 60 年 法学博士取得 (東京大学)

平成 4 年 獨協大学法学部教授

平成 12 年 東京都立大学法学部教授

平成 17 年 首都大学東京都市教養学部教授 (～平成 25 年 3 月)

平成 25 年 首都大学東京名誉教授

2 本学法科大学院における教育活動 (担当授業科目)

平成 23 年度 「政治学特殊授業 2」

平成 24 年度 「政治学特殊授業 2」

平成 25 年度 「政治学特殊授業 2」

平成 26 年度 「政治学特殊授業 2」

平成 27 年度 「政治学特殊授業 2」

3 研究活動 (過去 5 年間について)

(1) 著書

『大韓帝国の保護と併合』

(共編著, 東京大学出版会, 平成 25 年)

(2) 論文

「併合と自治の間—伊藤博文の国際・韓国認識と『保護政治』」

(単著, 平成 23 年, 『東アジア近代史研究』第 14 号)

「日本の対韓政策におけるロシア・アメリカ要素と韓国ナショナリズム」

(単著, 平成 24 年, 『近代日本研究』第 28 巻)

「『保護政治』下の韓国ナショナリズム—その成立過程をめぐって」

(単著, 平成 24 年, 『法学会雑誌』53 巻 1 号)

「『保護』から『併合』へ—日本の韓国『保護政治』の官僚制化」

(単著, 平成 25 年, 森山茂徳・原田環『大韓帝国の保護と併合』東京
大学出版会所収)

4 学外での公的活動及び社会貢献活動

東アジア近代史学会会員・理事、朝鮮学会会員

東京女子大学非常勤講師 2014 年 9 月～2015 年 3 月

「比較思想 朝鮮・韓国ナショナリズムと東アジア政治外交史」

登録番号 28 (7)

首都大学東京法科大学院年次報告書
(自己点検・評価報告書)
2015年度版

平成 29 年 3 月発行



この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。



古紙パルプ配合率70%再生紙を使用しています